
やがて花咲く彼女たちへ

あやし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やがて花咲く彼女たちへ

【Nコード】

N5331Y

【作者名】

あやし

【あらすじ】

プロデューサー、それはアイドルと共に歩む者。しかし現実はいかに、マネジメントから営業、掃除に洗濯、炊事に買い出しまであらゆることをこなす（強制）万能営業マンとしての日々が続く。彼に本業であるはずのプロデューサーをする日は来るのだろうか。TV版アイドルマスターのプロデューサーである彼に（一応）スポットを当てた作品……になる予定です。

第一話 だから営業ではないと（前書き）

「THE IDOLM@STER^{アイドルマスター}」はバンダイナムコゲームスの原作・著作物であり、当作品はその二次創作小説です。作品中の諸設定はテレビアニメ版を参考にしておりますが、公式設定とは一切関係ございませんのでご注意ください。

第一話 だから営業ではないと

『 営業 』

それは男の子達の永遠の憧れ。

だが、その頂点に立てるのは、ほんの一握り……

そんなサバイバルな世界に、

1人の男の子が足を踏み入れていた。

「……ん？」

今、何かおかしなテロップが流れた気がする。しかも肩書きが間違っていた気がする。オレは営業ではなくプロデューサーだ。まあ仕事内容としては実質的に変わらないが……いやいや。そうではなく。

「ああ、すみません。ええっと今度の土曜日ですよ？ はい、はい……大丈夫です。如月千早と天海春香ですね」

飛びかけていた集中力を再び受話器に戻す。大事な電話中なのに意識が飛ぶつてのは疲れているのかなオレ。今度の休みはゆっくり休もう……って次の休みっていつなんだろう。と思いつつ電話越しの打ち合わせは終了し、静かに受話器を戻して一息つく。

「お仕事ですか？」

ふと気配がして顔を上げると、765プロの事務員である音無小鳥さんが熱いお茶の注がれた湯飲みを運んでくれていた。

「はい、先週顔出しておいたかいましたよ」

湯飲みを受け取り、一口啜る。765プロのお茶の味にも慣れてきた。早くもくたびれ始めている自分の手帳に書込み、そして同じ事をホワイトボードにも書き込む。

『12:00～14:00 さくらTV、第五スタジオ。千早、春香』

白いホワイトボードに黒い領域がちょっとだけ増える。まだまだ予定が埋まっていない日が多いが、某社の洗剤並に白さが眩しかったちよつと前に比べれば格段の進歩である。うんうん。

「相変わらず白いわね」

自己満足に浸るまもなく、痛烈な一言が後頭部を叩く。可愛らしい中にトゲがあり、それがまた魅力なのだとかどうとか。

「お、お帰り伊織」

心の中で後頭部を擦りながら振り返れば、ブリ……水瀬伊織がソファにその小さい身体を沈めていた。仕事を終えて戻ってきていたのか。ツンとすませて何だか不機嫌オーラが漂っている。続いて、伊織とはいろいろな部分が対極にある女性、三浦あずさがおつとりとした足取りで現れて挨拶をした。

「あらプロデューサーさん、おはようございます」

「おはようございます、あずささん。今日の仕事はどうでしたか？」

心の中で手帳に書かれた予定表を捲る。今日は早朝から単発ながらドラマの撮影が入っている。伊織、あずささん、真の三名が参加。

真はその後にダンスレッスンが入っているから直行している予定だ。

「はいー、皆さんいい人ばかりで楽しかったですよ」

あずささんが微笑む。それだけで周囲の空気が、いや時間がゆっくりと流れ始める。ほんわかとしてゆったりとしたフィールド。なるほど、この空間において迷子などというものは些事ではなく、む

しろ必然なのであり迷子という言葉の定義すら揺らいでい……

「はっ?!」

ハッ与我に返り、思わず身構える。まさか今のは何かの攻撃か？

ゴゴゴゴという幻聴が響いてきそうな……。

「フンっ、なにデレデレしちゃってるのよ。これだから男っていうのは」

「……たはははっ」

伊織のジト目に引きつった笑いを浮かべる。いやデレデレしてた訳じゃないのだが、言い訳するとドツボるので笑い誤魔化す。

「とりあえずお仕事ご苦労様。今日の予定は……午後からレッスンだけか。どうする？ もしよければ昼飯でも一緒にどうだ？」

「お昼……ねえ」

伊織はちらりと視線をこちらに向け、ツンと閉じる。

「まあ、どうしてもというのなら付き合っただけでもいいわ。でもカポッテラ限定ね」

「うぐっ、ま、まあいいだろう」

カポッテラとは765プロの近くにあるイタリア料理店の名前である。ちなみに伊織が指名するという点から、価格は察して欲しい。まあここに居る面子に奢ったとしてもオレの財布で何とかなるのが、伊織らしいといえbraしいのだが。

小鳥さんが経費で落としましょうか？と聞いてくるが、丁重に断る。もちろん正当な飲食費で通用する範囲だが、ここは矜持の問題である。今のはあくまでオレ個人の気持ちなのだから、自分の財布から出すべきなのである。

んで、お昼。

……い、今おこったことをありのまま話すぜ。

「伊織、あずささん、小鳥さんをお昼に誘ったら、出掛ける頃には

全員集合していた。何を言っているか分からないと思うが、オレも何をさ（以下略）

営業。

その基本の一つは「断らない」ことである。断った仕事は他に流れるし、何よりも次の仕事の声が掛かりにくくなる。仕事を依頼する方も目算や予定をある程度組み立ててから声をかけてくる。断られればその予定の変更が必要だし、そして次はそうならない様にしようと思うのが普通である。だから「断らない」ということの意味は、重い。

「あー、えつと二十五日ですか。となると再来週の水曜日ですよ。ちよつと待っていただけますか。今予定確認しますんで……」携帯電話を頬と肩の間に挟んで、予定を確認する為に手帳を捲る。振りをして、心の中の手帳をつらつらと捲る。手元にある現実の手帳は既に開かれていて、予定表が開かれている。二十五日は、黒い。だから今のは、心の手帳を検索するちよつとした時間が欲しかったのだ。

「……そういえば、例のイベントってどうなりましたか？　そうですそうです、月末の、はい。それです」

心の手帳に刻まれた情報を元に会話を続ける。雑談を装いつつ話題を横滑りさせていく。

「はい、はい。どうでしょうか、ウチの響とかは？　そうです、前回のあの子です。ダンス得意ですし……え？　はい、二十五日の件は一旦保留で。はい、大丈夫です。それではまた改めて打ち合わせるということで、はい」

最後に他愛のない雑談をしてから、携帯電話の通話が切れる。

ふう、上手くいったか。

営業の基本は「断らない」。しかし実際には断らざる得ない場面にも遭遇する。その時どうするか。答えは「代案を提示する」。つまりこちらが断るのではなく「相手に」変更してもらうのである。

それを成功させる為には代案が魅力的である必要があるし、その為には相手の状況を確認しておく必要がある。心の中の手帳には相手のディレクターの仕事状況がメモしてある。最近の仕事の方向性、スタッフとの雑談などから得られた情報など……。

今のは月末開催のイベント内容の変更を提案し、それに連動して二十五日のイベント内容を変更させるという高等テクである。結果としてこちらから断ることなく、都合の付かない仕事依頼を無かったことにして、かつ新しい仕事を獲得した（予定）のである。

オレは少しぬるくなったお茶を啜りながら、満足げに一息つく。うむうむ、これが営業の醍醐味だろうか。なかなかここまで綺麗に成功することは稀だが、それだけに感慨も深い。いやまあオレは営業ではないのだが……良い仕事をして悪い気はしないのである。

再び携帯電話が鳴る。今日の着信音は「神SUMMER!!」である。基本、売り出し中の楽曲をローテーションで着信音にしている。これもささやかな営業努力である。

「はい、765プロです」

自然と声も軽やかになる。今日は仕事先からの電話が多い。地道な努力が少しずつ実を結んでいく。そんな感触がある。

「え、っ……二十五日ですか」

現実と心の手帳を捲る手が、ぴたりと止まった。

『仕事は少ないほど、重なるものである。』

―無名の営業戦士』

……数分後。

仕事を断っているオレがいた。黒いホワイトボードへの道は遠く、
険しい……。

「ねーねー、プロデューサーさん机に突っ伏しているけど、どう
したのかな？」

事務机が並べられた一角の隣、ソファとテレビが置かれたリビング
的空間。そこからプロデューサーの方を覗き見ていた春香が頭を引
つ込め、ひそひそ声で囁く。集まっているのは気まずそうな顔を
している真と雪歩、何か満足げな表情で食後のお茶を嗜んでいる貴音、
そして亜美真美である。

「……さすがに全員で奢ってもらうのはマズかったかな。高そうだ
ったよねあの店」

「で、でもプロデューサーさんは奢りだって言って払わせてくれな
かったし……」

「それが男子の矜持なのでありますう」

「うーん、いおりんに聞いたなら『男ってホントにバカよね』って怒
ってたよん」

「兄ちゃん、とても高給取りには見えませんかなあ」

「うっーん、大丈夫かなー」

春香は再び事務机のある方へ振り返る。机の上に突っ伏していたプロデューサーはよろよろと上体を起こし、一口お茶を嚙ってから再び電話を掛け始めていた。ややして、鞆を片手に机を離れる。

「ちよつと打ち合わせに行ってくる。今日のレッスン予定は分かっているよな？」

「はいーっ、大丈夫ですっ」

春香を筆頭に五月雨に返事をしていく。プロデューサーはそれを聞いてから、終わったら顔を出すからちゃんとレッスン受けるんだぞ、と言いつつ慌ただしく事務所を出て行った。その後ろ姿を真と春香が見送る。

「最近外出多いよね」

「うんー」

まあ営業の為の外出は前から多かったが、売り込みの場合は当然というか昼間の外出が多い。対して打ち合わせの場合は深夜まで続いたり早朝からということもあるから、朝から深夜まで出突っ張りということもありえる。

プロデューサーの財布の中身も心配だったが、身体の方も心配といえど心配である。人間、身体が資本である。春香たちには体調管理をしてくれる人もいるが、プロデューサーにはいない……気がする。あれ？ 結婚してるんだっけ。ちゃんと食事しているのかな。まさかカップラーメンですませているとか……独身だとしても、自炊出来るのかな。

事務所で一番最初に出勤して最後に退勤するのは小鳥さんだが、二番手はプロデューサーである。退勤に関しては小鳥さんより遅い事も多い。そんなに朝早く夜遅いのなら、ちゃんと睡眠時間は取れているのだろうか。通勤時間は……はどのくらいなんだろうか。

「……そういえば」
プロデューサーさんのこと、結構知らないこと多いよね。
春香はそう思った。

第二話 いなくつても世界は回る（前編）（前書き）

「THE IDOLM@STER^{アイドルマスター}」はバンダイナムコゲームスの原作・著作物であり、当作品はその二次創作小説です。作品中の諸設定はテレビアニメ版を参考にしておりますが、公式設定とは一切関係ございませんのでご注意ください。

第二話 いなくつても世界は回る（前編）

「無尽合体キサラギ」というマイナー番組がある。

某ケーブルテレビ局の情報番組内で放送中の、五分程度のコメディドラマである。

高校の文化祭並のチープな作りと、際どいパロディネタが極一部の層に受けているとかで、不定期ながらもコツコツと続いている。一話限りの予定が四話に延び、現在は六話目である。撮影用のムービーカメラもホームビデオから、ちゃんとした放送局用のものにレベルアップした。放送時間延長の話もある。この作品を企画した自称監督は「このウェーブに乗って、いずれは劇場公開だ」と息巻いているらしいが、さすがにそれは夢見すぎだろうと思う。……思うよな？

その自称監督は古くからの765プロのファンだそうで、そういう訳で今はアイドルを引退してプロデューサーをしている律子も特別出演している。まあロボット役なんだが。律子いわく『本人出演でないから（しぶしぶ）引き受けた』とのことだが、その代わりのあのロボットであるわけで、端から見るとどっちが良いのかよく分からない気がする。いいのか、アレで。本人出た方がマシなんじゃないのか。

ローカルかつニッチ過ぎて、765プロの知名度向上への貢献度は微々たるものだが、定期的なお仕事というのは営業的には有り難い。普通のサラリーマンをしているとつい忘れがちになるが、定期収入とは真実有り難いものである。ははー。

『恐れひれ伏し、崇め奉りなさいっ！』

そして春香が悪役、しかも親玉である。最初、手書きの配役表を受け取った時には一体どういう判断なんだと思ったが……。こうして撮影の様子や実際の映像を見てみると、この配役を思いついた人間は天才なのかなあと思わなくもない。斜め上の方だが。

今日も児童公園に、春香の高笑いがこだまする。

青い空、暖かな春の風を受けながら、オレはしみじみと思った。

……なんか、生き生きとしているなあ……。

アイドルのお仕事が少ないからと言って、営業の仕事が少ない訳ではない。

定期的なお仕事がない分は飛び込みやスポット（一回限りのお仕事）をこなしていく必要がある訳で、その獲得の為に日夜飛び回ることになる。この業界における営業の打率というものがどの程度なのか、まだ日の浅いオレにはよく分かっていない。が、業種を問わず営業というものは、世間が想像するほど高くないということだけは言えると思う。プロ野球の四番バッターの打率が三割越えであるが、凄腕の営業マンでもその率は出ないだろう。オレの打率はいえればプロ野球選手であれば今季限りで引退間違い無しな数値であり、打率が低ければ足りない分は数で補うしか無く、数で補おうとすれば時間を消費するしかないわけで、ここに営業インフレーションが成立する訳である。いやデフレか？

まあそんな訳で、睡眠時間と休暇が限りなく削られているオレだ

が、さすがに全く休み無しで働ける体力は持ち合わせていない。倒れる前に、今週の日曜日は久方ぶりの休みを取ることにしたのである。

……あー、一応言っておくが、私はプロデューサーであって営業ではない。そろそろ空しくなってきたが、主張することに意義があるのである。

目が覚める。

カーテンの隙間から、一筋の光が室内を横断して床から壁にかけて線を引いている。

目覚まし時計を掛けずに寝たから、今何時かよく分からない。目を凝らして……十時、ぐらいか？ 眼鏡をかけてないので時計の針がぼんやりとしか見えない。まあ九時以上十一時未満だろう。

あー、うー、さてどうするか。起きるか、もう一眠りするか。

折角の休みだから起きるのもよし、折角の休みだから惰眠を貪るのもよし。今、選択の自由がここにある。自由って素晴らしいなあ……

結局。

選択の自由を行使する幸せに浸りながら睡魔という強制的な選択により、惰眠をもう少し貪ることになった。

日曜日といえば高校は休みである。

天海春香は、通勤通学の為に朝はまだ明け切っていない時間に起き

るのが日課である。東京から少し離れている場所に在住している為、中距離電車での通勤通学に時間が掛かるからである。母親と一緒に弁当を用意して、朝食を食べて、空が少し薄明るくなった頃に自転車を出掛ける。

今日は少し違う。日曜日ということで母親はまだ寝ている。春香は一人台所でお弁当の準備をするが、仕込みだけをしてそれをバスケットに収める。簡単な朝食を食べた後、いつもの時間に出掛ける。制服か私服か、少し悩んで私服にした。

自転車で最寄り駅へ、中距離電車で東京都内に入り、山手線と地下鉄を乗り継いで765プロのあるビルの上に到着する。朝日はすっかり昇っている。コンビニで菊地真と萩原雪歩と合流し、一緒に事務所に向かった。

「えっ？ プロデューサーさんの住所を？」

音無小鳥は少し驚いた風で、春香たちに振り向いた。そこには春香を筆頭に真と雪歩が顔を揃えている。三人とも今日はお仕事無い組であり、世間的な休日でもある。そういう時彼女たちは学生らしく事務所に集まって自習などをする必要がある。だから今日もそんなのかなと思っていた。

「はい、最近プロデューサーさん忙しくしてて、ちゃんと食事しているのかなーと思って」

春香は満面の笑みで、三人で作ったお昼ごはんですー、と両手で小さなバスケットを掲げてみせた。なるほど。三人が給湯室に集まっていたのはそういう訳だったのねー。

プロデューサーさんも765プロの社員である。住所やその他の情報は当然把握している。しかし昨今は個人情報保護等々が五月蠅く叫ばれるご時世である。親しき仲にも礼儀あり、勝手に教えて良いものかどうか。

……という型通りの思考を一瞬だけした後、小鳥はそれほど厚くはない社員台帳を寸毫の躊躇いもなく取り出していた。春香ちゃんたちのプロデューサーさんを労いたいという気持ちは尊重したいし、むしろ後押ししてあげたい。大丈夫よ、春香ちゃん。勝手に住所を教えたなー、なんて文句を言う人じゃないと思うし、もし言つてきたらそれは春香ちゃんたちの心尽くしを無にするってことよね。小鳥、そうになったら……ふっふっふ。

「はい。分かっていると思うけど、誰か他の人に教えちゃだめよ」
一通りの注意事項を言い含めたのち、小鳥はプロデューサーの住所をメモ書きにして渡してあげるのであった。

「……朝日町の1945番地、だつて」

「意外と近くなんだ」

春香が開いた地図のコピーを真が横から覗き見る。

765プロの最寄り駅から地下鉄で二駅。駅からは歩いて十分ぐらいで朝日町界限に到着する。大通りからは少し離れていて、細い路地と古びた住宅やアパートが立ち並ぶ一角である。人気はあまりなく、しんと静まりかえっている。東京といえば雑踏というイメージが、ここには無い。

手元の地図を見ると、大雑把な番地は書いているが十番台の地番までは刻まれていない。とりあえず1900番地まで来たので、あとは表札や電柱に書かれている番地を見ながら歩いていく。

細い路地。

アスファルトは敷かれているが、車が通れる幅ではない。道の整備

も杜撰なのか、道のあちこちに掘り返して埋め直した後がパッチワークの様に続いていく。その隙間から、道草が顔を出していて、それは近隣の住居の薄暗い庭の緑と合わせて都心では貴重な緑を提供している。そんな風にも見える。

「1930……1935、6……1940……あ、あれ？」

春香の足が止まる。

順調に近づいていた1945番地が、突然1300番台へと変わってしまっている。念の為次の電柱まで足を伸ばしたが、今度は900番台となってしまった。

「こ、これは……」

「春香ちゃん春香ちゃん。地番だと順番に並んでいないことが多いから……もっと細かい地図ないよね？」

雪歩の言葉に春香は首を振る。雪歩は区役所に行けば地図が……とぶつぶつ呟いている。いわゆる丁番号で記される住所表記と違い、地番はその番号が整然と並んでいないケースが多々ある（だから住所表記が導入されたともいえる）。この朝日町もそのケースの一つである様で、1945番地に近づきはすれど一向に辿り着く気配が感じられない。

雪歩は親の職業柄こういうことには詳しそうだったが、今手持ちの地図だけで解決するのはやはり難しい。

「よし、こうなったら！」

春香は住所を書いた紙を握りしめ、丁度前方の十字路の角から現れた人物に向かって駆けていった。角から現れた人物は少し白髪の交じった黒髪の年配の女性で、サンダルにスーパールのビニール袋を下げている。どうみても地元に住人と思われる風体だ。

「あ、あのすみません。この辺りで朝日荘ってアパートご存じないでしょうか？」

春香は深々とお辞儀をしてから、年配の女性に紙を差しだして道を尋ねた。女性は少し警戒の表情を浮かべたが、春香の笑顔を見てニコリと微笑み返した。春香と紙の間で視線を一往復させた後、口

を開いた。

「Why？」

「ふ……ふわい？」

英語だった。

手振り身振り、そしてなぜか歌を一曲披露した後、ようやく意思疎通に成功した。大まかな目的地の場所を教えてもらい、チヨコレートのお菓子を一つ貰った。たぶんお捻りのつもりなのだと思われるた。

「音楽は国境を越えるって本当だったんだね！」

「いやあ、それはどうかと……」

「むしろなぜ歌うことになったんでしょうか……」

約二名は微妙な表情をしていた。

入手した情報によると、朝日町の1945番地は私道しか通っていない区画の中心にある様だった。実際に行ってみると、どう見ても人の家の庭にしか見えない所を抜け、砂利道を細かく二度ほど曲がった先にあった。

二階建ての、灰色の壁をしたアパート。それが朝日荘らしかった。壁は元が白で汚れて

灰色になっている感じで、全体的に古びている。この区画自体古い建物が多いが、それに輪を掛けた感じである。

目的地は二階、203号室。春香たちは軋む外階段を上り、二階の一番奥にあるところの部屋を目指す。外廊下は狭く、しかも各部屋の洗濯機が設置してある。ごろんごろんと音を立てているその脇を擦り抜け、203号室のドアの前に立つ。表札を見るが、名前は無く空欄になっている。呼び鈴があったので押して見たが反応は無い。壊れてい……

「……あつ」

突然ドアが開いた。驚いた春香が短い声を出す。突然開いたことに驚き、そして出てきた人物に驚いていた。出てきたのはプロデューサー……では無く、男性でもなく、女性だった。年齢は春香たちより上、大人の女性だった。三十には見えないが、すっぴんの顔が逆に色っぽい。そして薄着……下着姿ではないが、限りなくそれに近い。そんな姿で顔を出す女性を見て、逆に春香たちの方が顔を赤らめた。

しばし無言の時間が流れ、はっと我に返った春香が慌ててお辞儀をする。

「あ、あのっ！ こちらは……こちらは……」

住所は間違っていない。だからここはプロデューサーさんのお宅のはずで、そこから顔を出したこの女性は身内……とは限らないが、少なくとも関係者だと思われた。まずは挨拶と、ここがプロデューサーさんのお宅であることの確認を……。

「ぶ、プロデューサーさんのお宅でしょうか？」

「は？」

女性は思いつきり怪訝そうな顔をし、真と雪歩はずっこける。

（春香っ、名前で聞かないとダメじゃないか）

（ででも……真ちゃん、プロデューサーさんの名前知っている？）

（それはっ！ それは……プロデューサーは……プロデューサーは

………雪歩は？）

（ええっ?! し、知らないですう。てっきり春香ちゃんが知ってるんだとばかり……）

（プロデューサーさんは……プロデューサーさんだよねっ！）

ひそひそ話がエンドレスする。

「よく分からないが……眼鏡掛けた男のことかい？」

呆れ顔で傍観していた女性だったが、終わりそうにないので助け船を出す。

「そ、そうです」

「眼鏡掛けて、背は普通で、頼りがいのありそうではない感じで、

でもちよつとはやるかも知れない感じの、でもやっぱりダメっぽい
みたいな」

「よく分かりませんが、でも何となくそんな感じです。」

「ふむ」

春香たちの顔を見回してから、女性は何か納得した様子だった。諦
め風のため息を一つついてから、半開きだったドアを大きく開いて
みせる。

「ヤツならちよつと出掛けてるよ。すぐ戻ると思うから、なんなら
中で待ってるかい？」

第三話 いなくつても世界は回る（後編）（前書き）

「THE IDOLM@STER^{アイドルマスター}」はバンダイナムコゲームスの原作・著作物であり、当作品はその二次創作小説です。作品中の諸設定はテレビアニメ版を参考にしておりますが、公式設定とは一切関係ございませんのでご注意ください。

第三話 いなくつても世界は回る（後編）

都内に住んでいて便利なのは、どこへ行くにも近いという点だ。

この業界、なんだかんだいって都内に事務所やらスタジオやらが数多く存在する。もちろん関東近郊や地方もあるが、移動距離・時間・コスト等々を計算した場合、まず都内を押さえることのメリットは大きい。特に移動コスト、いわゆる交通費の問題は地味に大きい。自腹となれば尚更だ。

久しぶりに遅い朝食を食べた後、オレは外出した。服装が背広でない外出は本当に久しぶり……思い出せないぐらいに過去の話だと気づいて、少し遠い目をする。

最寄りの地下鉄の駅から山手線に出て、ぐるりと半周する。駅前のコンビニで適当に缶ジュースを数本見繕った後、目的地へと足を運ぶ。駅前からは少し歩くが、それほどの離れている訳ではない。五分、十分ぐらいか。目的地へ直接は行かず、ぐるりと散歩がてらに遠回りをする。辺りはオフィスビルが多く、駅前にはよくある歓楽街は駅の反対側に集中している。近くの公園も綺麗に清掃されている。周辺環境は良好といつてよく、なるほど、765プロの事務所からは少し遠いがこのダンススタジオにアイドルたちを通わせている理由のひとつが分かった様な気がした。

「あら、765プロのプロデューサーさん」

スタジオの受付に顔を出すと、カウンターの中にいた女性が声を掛けてくれた。いつもお世話になっているインストラクターの人だ。

振付師でもある。今の765プロのアイドルたちのレッスンをデビューー当時から見ているので、彼女たちとの付き合いはオレより長いことになる。

「どうしたんですか？ 今日はお休みですよね」

「いやー、今日はちょっと見学に」

差し入れの缶ジュースの入った袋を手渡しつつ、少し雑談に興じる。

日曜日、午前中ということもあってか、スタジオの利用者は疎らだ。基本ここのスタジオの利用者はプロが多いが中にはアマチュア、趣味でスタジオに通っている人もいる。ちょっと失礼してドアの小窓から中を覗くと、小柄な女性がダンスの最中だった。跳躍の多い激しいダンスで、素人目にはプロ顔負けの腕前である。なんだか勿体ないなあ、と思ってしまふのは早くも職業病に罹り始めているのだろうか。あれほどの技術で趣味でしかないというのは、つまりただダンスが好きで、かつそれで完結しているのだろう。

そういえば、真と響もダンスが得意な子たちだ。

彼女たちにとってダンスとは何なのだろうか。もちろんダンスが好き、身体を動かすのが好きなのは間違いない。その上で、アイドルを目指す人間とそうでない人間がいる。いや、より正確に言えば、無数に存在する多種多様な目標の内の一つがアイドルという道であり、また趣味という道なのだろう。

『ダンスが得意で、もっともっと大勢の人に見て貰いたいです！』
記者からのインタビューで、真がそう答えていたのをふと思い出した。

……なんだか、こう、もやもやする。明確な言葉として存在しながら、しかしその内容は曖昧ではつきりしない。少なくともオレには明確に説明できない。新米営業ま……プロデューサーとして色々走り回ってきて、その中で感じていたほんの少しの違和感。それは多分、明確な目標を描けていないからだ、と思う。言葉としてはある。目指せトップアイドル。そう、言葉としてはこれほど明確なのに、オレの心は足の踏み場を探して迷走している。

……アイドルって、何なんだろうな……。

室内は雑然としていた。

古びたアパートで、トイレはあるがお風呂は無い。小さなキッチンと小さな卓袱台があるリビング相当の部屋と、南側にあと二部屋。片方の部屋には女性モノの下着が干してあり、もう片方は男性用の下着が干してある。女性は吊している紐ごと女性用下着をもう一つの部屋に投げ込んで襖を閉め、床に散乱している本やら何やらをざっと片付けてて小さなテーブルを出した。

「ちよつと待つてな」

女性はそういつて春香たちをテーブルの周りに座らせてから、すぐそばにある小さな台所に立った。お湯を沸かしてティーパックの紅茶を注いでいく。少し緊張した春香は出しそびれたバスケットを抱えたまま部屋の中に視線を泳がし、そして窓際に置かれた本棚に落ち着いた。

『誰でもできるマネジメント入門』

『他人には聞けない文書の書き方』

『流行通信 vol.101』

『実用装飾辞典』

『その時歴史は動いたかも知れない』

などなど、高校生の春香にはあまり縁のない本がずらりと並んでいる。そして一番下の棚はアイドル写真集で埋め尽くされていた。春香でも知ってる名前から、なんだか時代を感じさせる名前まで多種多様だ。

「はいよ。すぐ戻ってくると思うから」

女性が戻ってきて、不揃いのカップに注がれた紅茶が振る舞われる。お茶請けは煎餅のアソート。来客用の組み合わせには見えないが、

女性は何事も無いように紅茶で煎餅を食べているので、ここではこれが普通なのかも知れない。とりあえず春香は煎餅には手を付けず、紅茶だけ頂く。

「あのー、こういったらあれですけど」

そう切り出したのは真だった。

「いきなり押しかけてきて、しかも面識なくって、でも、こうやって家の中に入れていただいて、あのー良かったんでしょうか？」

「まあ、そう珍しいことじゃないからね」

「そ、そうなんですか……」

珍しくない。それは、こうやって女の子が訪ねてくるということですよ。あれ？ プロデューサーさんは新米でしたよね。ということとは、その女の子たちって誰？ しかも珍しくないって、あたしたち以外の765プロのメンバーが？ いや小鳥さんの話だとあたしたちが初めてって……あ、あれ？

「あんな男のどこが良いんだか」

「ははは……」

三人の笑い声は固い。彼女たちの中でのプロデューサー像は大崩壊中で、急遽再建中だ。しかもその再建は大混乱中で、例えるならピカソかダリかという造形になっている。

「まあこうやって訪ねてくる人間がいるってことは、上手くやっているってことかな」

「上手く？」

「あいつが仕事を、ね。仕事仲間なんだろう？」

「は、はい」

仕事仲間と言われれば、そうだ。なんというか、そういう意識は不思議となかったが……単なる仕事仲間と言われると違和感を感じるが、かといって適切な言葉は見当たらない。「仕事仲間」と「年上の先輩」と「一般的なプロデューサー」のいずれでもなく、たぶんその真ん中辺りにいそうな感じだ。

「どとどと言うご関係なんでしょうか？」

春香は思い切って女性に聞いてみた。色々言葉が抜けているが、勿論プロデューサーと女性の関係である。

「恋人……じゃないかな。たぶん単なる腐れ縁」

さらっと言う女性。そこには気負いも何もない。

「血は水よりも濃しつていうけど、親兄弟との関係って切っても切れないんだよね。それと比べて、あいつとの関係は水つてところかな。そこにあるのが当たり前で普段はは気にもとめない。でも何だかんだで必要な存在だったりする」

「それって親兄弟と、どう違うんですか？」

真が聞く。

「血は身体の中だけど、水は身体の外にあるっていう点かな」

「肉親と他人の違いってことでしょうか？」

勿体ぶった言い方に雪歩が応え、女性は満面の笑みを浮かべる。そうそう、察しの良い子は大好きよー、と頬摺りする。

「まあ必要というのはちよつとあれかな。正確に言えば……不可欠ではないし、絶対に必要と言い切れるほど重要でもない。いなくつても世界は回る。でも……」

女性は窓の外を見る。窓の外の風景の下半分は隣の家の屋根が占め、上半分は遠くのビルが塞いでいる。

「たぶんアイツの居ない部屋で見る朝日の色は、違うんだと思う」
女性の視線に釣られて三人も窓の外を見る。それはどこにでもある東京の空で、東京の空だった。ちらりと女性を見て、それでたぶん女性は何か別のものを見ている。それだけは理解出来た。

「まあ君たちにはまだピンとこないかな」

少しはにかんだ様な微笑み。どこか達観した感じのある女性が、初めて見せた感情だった。それを見て春香は、ようやく本当に聞きたかった質問に辿り着いた。

「あの……貴方は、元アイドルなんですか？」

女性は少し目を丸くして、そして悪戯っぽく口元をつり上げて答えた。

「さあ？ それはご想像にお任せするよ」

しばらく他愛のない雑談に興じていると、ドアが開く音がした。三人と一人がすぐ背後の玄関に振り返ると、ドアの向こうから眼鏡を掛けた男性がぬつと姿を現すところだった。

「あら？ プロデューサーさん」

小鳥がドアの開く音に振り返ると、意外な訪問者がそこにいた。今日は休みのプロデューサーさんである。うーん、私服姿のプロデューサーさんも何か新鮮な感じがするわねー。もう少し、もうちょっと美形さんなら私の妄想り……はっ？ んー、こほん。

「うふふ、春香ちゃんたちに会えましたか？」

「春香？ 今日は休みじゃないのかな」

「え、あつと、そうなんですけど」

あれ？

「そうそう音無さん。これお願いします」

そう言ってプロデューサーは一枚の書類を差し出した。タイトルは……『住所変更届』。

「えっ？」

765プロも小さいながらも会社である。残業申請、交通費支給、年末調整……色々な届出書類がある。それら进行处理するのが小鳥の仕事の一つであるから、プロデューサーが差し出した書類がどうい

う内容のものは熟知している。タイトル通り、引越等で住まいが変わった時に会社に申告する為の書類だ。

「お引越越されたんですか？」

「はい。といつても随分前……ここに入社する直前なんですけど、会社には元の住所で入社手続きしていたのをすっかり忘れてましてたぶんオレの住所、朝日町になってますよね？」

「え…、ええっ」

確認しなくても分かる。というか今日確認したばかりである。地図込みで。

（あれ？ ということは春香ちゃんたちが向かったトコロは……。）
小鳥はたらりと冷や汗を流した。

「おー、おかえり」

「ただいまー」

女性が眼鏡の男性に声を掛け、男性がそれに応じる。サンダルを脱ぎ、両手に持ったスーパールのビニール袋を下ろして一息つく。今、室内で動いているのは女性と眼鏡の男性だけであり、約三名は固まっていた。その視線を眼鏡の男性に注いだまま。

眼鏡は掛けている。

そして男性である。その点においてはプロデューサーと合致するが、しかしどうみても共通点はそこだけだった。筋肉隆々の肉体は誰よりも逞しく男らしい。顔つきも強烈な意志の強さが感じられ、この部分を切り出して見ても「頼りがい」というオーラを発散していて、真の後ろで雪歩は完全に石化していた。

「おー、お客さんだよー」

「あー、どうも。ごゆっくり」

男性がぺこりと挨拶をする。そしてそのまま三人の横を通り過ぎて、台所で冷蔵庫に買い物してきたものを片付け始める。

「あー、それは私がやるからさ。ほら」

女性は男性からスーパールの袋を取り上げると、強引にテーブルの前に座らせた。春香たちと男性が面向かい、ちょっとした沈黙の後、とりあえず同時に会釈をする。

「えーと、初めまして？」

「ははは初めまして、天海春香です！」

「……初めまして？」

台所で女性が目を丸くしている。女性は春香を見て、春香は男性を見て、更に男性から女性を経て戻ってきた視線に対して、春香はにへらと笑うことしか出来なかった。

「えーと、あの、あれ？ 初めまして……です」

十分後。眼鏡の男性と女性は、プロデューサーが引越した後に入居した赤の他人だという結論に辿り着いた。春香たちが何度も頭を下げ、女性は笑って「まあそういうこともあらあね」と言っているにすぎなかった。

「ああ、そうだ」

女性は何かを思い出したのか、一旦部屋の中に戻り騒々しい音が聞こえたのち、また外に出てきた。その手には一通の封筒が握られている。

「これ、前の住人さんに渡してよ」

「手紙……ですか？」

「うん、宛先不明で戻ってきたらしいんだよね。」

裏面にはプロデューサー……と思われる男性名とここの住所が書か

れている。表の消印は数ヶ月前。まだ彼が765プロに来る前だ。宛先の住所は東京ではなく地方で、住所に並んで書かれた名前は、女性のものだった。

女性と別れ、最寄り駅にまで戻ってきたところで見慣れた顔を見つけた。何やら渋い顔をしてこちらを見ている。眼鏡を掛けた男性だ。

「あ！ プロデューサーさんっ！」

春香が駆け寄り、真と雪歩がそれに続く。その眼鏡を掛けた男性は、今度こそ春香たちが知っている男性であり、プロデューサーだった。まったく、来るなら連絡ぐらい入れる」

「いやー、びっくりさせようかと思って」

「……私たちがびっくりしちゃいました……」

真が照れた様に頭を？き、雪歩の顔はまたちよつと青かった。

「えへへ、お茶ごちそうになっちゃいました」

「何やってんだか」

ま、何事もなくて良かったよ、と言ってプロデューサーは春香の頭をくしゃりと撫でた。春香はにへらと笑い、片手を上に突き上げた。「それじゃあ、今度こそプロデューサーさんのお家にレッツゴーですな！」

「いいっ？ も、もういいんじゃないか？」

「そうは行きません。ここまで来て引き下がったら女が廃るってもんですよ」

真が男らしく奮起する。いやそれは女と男、どっちが廃っているのか分からないんですが。

結局三人に押し切られる形で、プロデューサーの現住所へと向かった。地下鉄で三駅。前のアパートより、765プロの事務所にちよつとだけ近い。ワンルームのマンションでかなり築浅な物件だ。ドアを開いて中に入ると、小綺麗に片付けられた室内が見える。男性にしてはよく片付いている方か。几帳面といい。室内に洗濯物が干されているということもなく、一人住まい。窓の外に広

る空も、東京の空だ。

「……普通だねえ」

「うん、普通だね」

「……ですう」

何かすごいがっかりした表情で三人が呟く。

「お前達はオレに何を求めているんだ……」

こうしてようやく、少し遅めの昼食が始まったのだった。

春香たちが帰った後、オレは一通の手紙を見ていた。正確には封筒を、だが。差出人は自分。そして宛先不明の印が押されている。

つまりこの手紙は、宛先には届かなかったということだ。宛先は地方で、ある女性に宛てたものだ。

届かなかった。

まあそうなる可能性は高いと思っていた。正直住所に関してはかなり古くてあやふやな情報だったので、たぶん転居か何かしたのだろう。別段、必要な手紙では無かった。だから届かなくても良かった。少し残念な気持ちと、ほっとした気持ちが錯綜している。

その手紙を、机の引き出しにしまう。

もう今となっては何の意味も無い手紙だ。再度出し直す気もない。ただ、今この時期に戻ってきたことには意味があるのかな、と思う。偶然と片付けるにはタイミングが良すぎた。

引き出しに仕舞って、さて夕食の準備に取りかかる。

そうして日々の喧噪の中で、このまま手紙のことを忘れてしまう。そんな気がする。ただ、その中身だけはたぶん忘れないと思う。そ

んな気がした。

手紙の内容は短い。全文を思い出せるほどに。

『もう、アイドルは目指さないのですか？』

それはたぶんオレの一生で、一番短い手紙だった。

第四話 その夢の形は（前編）（前書き）

「THE IDOLM@STER^{アイドルマスター}」はバンダイナムコゲームスの原作・著作物であり、当作品はその二次創作小説です。作品中の諸設定はテレビアニメ版を参考にしておりますが、公式設定とは一切関係ございませんのでご注意ください。

第四話 その夢の形は（前編）

「無尽合体キサラギ」というマイナー番組がある。

不定期放送番組から週一放送番組に昇格したこのマニアックな作品は、ジャンルとしては特撮SFの範疇に入る。春香率いるハルシユタイン軍団の魔の手から世界を守る為、真美亜美の二人がスーパーロボット「キサラギ」と共に戦うストーリーである。千早が主役ロボット役なのは、自称監督の強い意向である。何でも絶対防衛正面装甲の摩擦係数がどーたらこうたらと力説していたが……。ダンボールで作られたキサラギを初めて見た千早は、じつとその胸を睨んでいたが結局一言も発しなかった。

さて、相変わらずの低予算の下に行く番組である。ダンボール製のロボットとはいえ、制作には意外と費用がかかる。そしてダンボール故に壊れやすい。なので毎回登場させることが出来ない。三話の内二話は役者だけの絡みで進んでいく。

今回の話は、春香の部下であり悪の組織幹部である真と、キサラギ側の登場人物である響の話である。逃げる響を追う真。追う者と追われる者、二人はついに団地の屋上で対決する。真は空手黒帯の腕前だし、響はその真に劣らない運動神経の持ち主だ。真が響に空手技を教えていたこともあって、二人の対決シーンは迫力のあるものとなった。

「でやあー！ 空中三連脚だぞーっ！」

「なんの！ 正中線四連撃っ！」

なんかリアルな格闘大会でも滅多に見られない様な技の応酬が繰り広げられているみたいだが、気のせいだよな。まあ迫力のあることはいいことである。

……しかし、響はキサラギを建造した「科学者」という設定だったはずだが……。

オレの仕事の大部分は、この頃も大体は営業である。以下略である部分はいつも通りなので行間を読んで欲しい。

律子プロデュースの竜宮小町がデビューして人気急上昇中な時期である。765プロとしては久しぶりに活気が出ているが、他のアイドルたちは相も変わらず鳴かず飛ばずな状態である。それをどうにかするのがオレの仕事だ。

竜宮小町がデビューして、やりやすくなった面も多い。

まず765プロの名前が売れたので、営業に行っても門前払いとかが激減したことである。まあ正確には765プロは知名度だけはあるのだが最近目立ったアイドルを輩出していなかったせいで「……まだ事務所あつたんですか？」とか言われることが多かったのである。竜宮小町によつてアイドル事務所としての能力が再度証明された訳で、話を聞いてくれる様になったのだ。もっとも「話を聞く」から「仕事を回す」までの間には大きく深い谷があるわけだが。

まあそれでも小さな仕事はぼつぼつと回ってくる様になった。その仕事の回し方でトラブルを起こしたりもしたが、今は順調である。人間、焦りは禁物である。

……いやしかし、確かに性格的な部分を考慮していなかった点は弁解の余地は無いのだが……雪歩のビルキャンペーン嬢は良いと思

うんだけどなあ……。

思うに、人間は意外と保守的なものである。

基本的に人間は安全な方へと進んでいく生き物である。好奇心が人に危ない橋を渡らせることはあっても、それは日常のほんの一瞬でしかない。十回行動して十回は無難な選択肢を選び、百回目にはもしかしたらリスクを取るかも知れない。それが人間である。

基本、リスクとリターンは比例する。ローリスクはローリターンであり、ハイリスクはハイリターンである。世の経済活動が規模の拡大を目指すのは、それがローリターンでも充分な収益を得る為の手段であるからだ。百万の元金から百万の利益を出そうとすれば賭事並のハイリターンが必要だが、一億の元金から百万の利益であれば手堅い手段で充分である。だから大組織ほどリスクを取ることはしない。

765プロのアイドルたちに足りないものがあるとすれば、それは知名度である。まあ765プロ自体が弱小プロダクションということもあるが……。知名度向上には全国規模の媒体に露出するのが手取り早い、その全国規模の媒体、テレビ局や全国紙などは知名度の低いアイドルの相手などしない。それは無名アイドルの登用がハイリスクだからだ。知名度のあるアイドルを起用すれば手堅いが大きく割を食うこともない。そして知名度のあるアイドルを使える立場にあれば、わざわざ無名アイドルを登用する必要もない訳だ。無名であるが故にチャンスは少ない。無名スパイラルとでも言うか。これが一つの、アイドルたちにとっての大きな壁である。これを越えなければ何も始まらないのだ。

その為の方策。

この時期、オレはとにかく営業を掛けることに注力していた。仕事が取ればそれに越したことはないが、そうならなくても良い。とにかく一件でも多く営業を掛け、そして最低三回は顔を出す。これを徹底して行う。

竜宮小町効果でやや上昇していたオレの営業打率は、再び下降していた。安打数はほぼ変わらないが打席数が大幅に増えたからだ。そして睡眠時間も下降していく。たまに差し入れられる春香たちの弁当の、なんと美味しいことか。

音無さん辺りからは「あまり無理しないでくださいね」と気遣われたりするが、律子への対抗心でやっている訳ではない。いや、全く無いとは言わないが、焦って失敗したあの時と一緒にではない。ある目標、計画の元にやっているのである。

『赤壁越え作戦』。

オレの中で勝手に命名したそれは、成功すればアイドルたちの前に立ち足かかる「壁」を乗り越えることが出来るはずだった。

オレは突然の事態に、一瞬思考停止した。

そういう状況を全く考えたことがない、とは言わない。オレと響の関係を検討すれば、そういう可能性もなくはない。ゼロではないだろうが、かといって実際に起きてしまうとは思わない。そういう事例だ。

深夜とっていい時間帯である。

コンビニで買った弁当を食べ終わり、さてシャワーぐらい浴びてか

ら寝るか。そう思った矢先に呼び鈴が鳴った。よくある「ピンポン」というアレである。オレはその呼び鈴を二回聞いてから慌てて立ち上がった。呼び鈴を鳴らされる行為が久しぶりだったので、呼び鈴をそれと認識出来なかったのである。何しろ前の借家はあのアパートであるし、ここも新聞屋すら訪れない小規模なワンルームマンションである。

慌てて玄関まで小走りしてドアを開ける。あ、鍵締めてなかった。オレが思考停止したのは、この瞬間である。理由は眼前にある。ドアを開けたすぐそこに、一人の少女が立ち尽くしていた。

健康的に日焼けした肌に、黒髪のポニーテール。八重歯とショートパンツは彼女の快活さを表現している。彼女の顔を見ると自然に沖縄方言が脳裏に響く。

我那覇響。

765プロに所属するアイドルの一人。その響が上目遣いでオレを見ている。

「……今日一晩でいいんだ。プロデューサー、泊めてくれ」

潤んだ目がオレの心を貫く。いや、それは卑怯だ。

「響お前……」

少し間を置いて、オレはようやく声を絞り出した。こういう可能性もありうるとは思っていた。が、実際そうなってみると破壊力は桁違いだ。一応想定はしていた幾つかの対処法は、今は真っ白になっている脳裏で行方不明中だ。

……いやまあ、響を追い返すという選択肢はありえない以上、オレの選択肢は一つしかないのだが。彼女を泊める。いや彼女「たち」か。

響の後ろには、かのキングダムにも比肩するかもしれない「兄弟」たちが控えていた。彼らもまたそのつぶらな瞳でオレを見上げている。ハムスター、ヘビ、シマリス、ウサギ、ネコ、ワニ、ブタ、イヌ、モモンガ。オレの記憶が正しければ、響ファミリー全員集合である。オレはぐるとその集団を見回してから、一つだけ響に確認

の為に質問した。

「マンション、追い出されたんだな……？」

「……ペット可だつて言つてたのに、ワニ美はダメだとか言つんだ」
しよぼんと響が答えた。オレがワニ美を見ると、彼女は「私は悪くない」とでも言いたげにその太い首を左右に振った。

事情はこうだ。

沖縄から、人間としては単身上京してきた響はある賃貸マンションに入居していた。ペット可ではあったが、ワニ美と散歩に出掛けるところを別の住人に見られてしまった。それで大家さんに苦情が寄せられたということである。

響も周辺の住人に配慮してワニ美の散歩は深夜にするとかしていたが、まあ入居して半年。いつかは誰かに見られてしまうものだろう。朝一番で大家さんの所へ電話を試みたが、大家さんも両者の板挟みになって困っていた様子だった。大家さん自身は響に好意的なのだが、ワニを怖がる他の住人の気持ちも分からなくはない。一応転居する方向で交渉中ということで時間を稼ぎつつ、大家さんの方でも転居先を探してくれている最中だという。

「プロデューサー、出来たぞー！」

響の明るい声が狭いワンルームに響く。入居以来、カップ麺用の湯気しか立ったことのなかったキッチンから、良い香りと湯気が漂ってくる。一応調理器具は一揃えあったが、材料とテーブルが無かった。材料はさつき響がコンビニに買いに行き、テーブルは引越用のダンボールを裏返して代用する。

ゴーヤと卵の炒め物。貝の味噌汁。浅漬け。そしてご飯。シンブルに朝食が並ぶ。いやしかしゴーヤとか貝とか、どんなコンビニに行ってきたんだ。響はペットたちにも朝食を配ってから、ダンボールの反対側に座る。

「さ、冷めない内に食べて食べて」

「あ、ああ。いただきます」

箸を手に取り、味噌汁から炒め物へと箸を進める。いや……美味しい。そーいえばゲロゲロキッチンでも響は料理美味かったよな。伊勢海老とか料理できるって、よくよく考えたらめちゃくちゃ上手なんじゃないのか。

オレが食べる様子を、響がニヤニヤとした顔で見ている。

「どうだプロデューサー、自分なかなかだろ？」

「ああ、美味しいよ。さすが響だな」

「……っ！ あ、ああ自分料理は自信あるさー」

素直に褒めたのに面食らったのか、少し顔を赤らめて言葉を詰まらせる。照れ隠しか、い、いただきます、と少し急ぎ足で食べ始めた。

「プロデューサー、一晩泊めてくれてありがとうな」

食事を終え、食器を綺麗に洗い終わった響が礼を言う。

「これからどうするんだ？」

「んー、とりあえず自分でもワニ美も大丈夫なマンションかアパートを探すつもり。なーに、心配ないさ。東京はこれだけ広いんだから一件ぐらいあるさー」

けらけらと笑う響。こういう前向きなところは長所である。えっと、なんくるないさー、だっけか。

しかし。

確かに東京は広い。一件ぐらいはあるだろう。しかしそれが見つかるまでの間はどうするのか。家族たちと出て行こうとする響に、呼

びかける言葉は一つしかない。

「響、ワニ美を連れて不動産屋にいくつもりか？」

「……あ」

気がついた響が驚きを声を上げる。まあワニ美だけじゃなく、その家族全員引き連れていったら大騒ぎになるだろうな。

「まあとりあえず、引越先が見つかるまではここにいなさい」

「で、でもそれだとプロデューサーに迷惑がかかるさ」

「いやオレ、ほとんど家にいないし。」

寢床のスペースさえあれば、オレは何の問題もない。居ない人間に對しては迷惑の掛けようがない。まさかここで忙しいことが生きてくるとは……ちょっと空しくなってきた。

「で、でも……」

泣く響に、オレはその頭をぽんと撫でるように叩いてやった。

「オレは響のプロデューサーなんだから、それぐらい面倒見させてほしいな」

「お……おう。わ、わかった……あ、ありがとう、な」

響は俯いたまま、しばらくその場に立ち尽くしていた。

第五話 その夢の形は（中編）（前書き）

「THE IDOLM@STER^{アイドルマスター}」はバンダイナムコゲームスの原作・著作物であり、当作品はその二次創作小説です。作品中の諸設定はテレビアニメ版を参考にしておりますが、公式設定とは一切関係ございませんのでご注意ください。

第五話 その夢の形は（中編）

朝、事務所に顔を出すと高木社長に呼ばれた。用件は決まっている。社長室に顔を出し、電話越しでは出来なかった細かい報告をする。概要だけは音無さん経由で報告を入れてあったのだ。

「我那覇君の話は聞いたよ。私の方でも何とか新しいマンションを探しているから、彼女の面倒を見てやってほしい」

「はい、もちろんです。オレの方でも探していますので」「うむ」

満足げに頷く高木社長。報告は終わった。社長室を出ようとするオレを、しかし社長が呼び止めた。なぜか背を向け、窓越しに外を見ている。

「時に……君は『海蛇』というものを知っているかね？」

「ウミヘビ、ですか」

海に棲んでいる蛇、のことか？ それで合っているはずだが、社長の態度から察すると何か違う気もする。

「いやあ、私も若い頃はやんちゃをしたものだよ」

遠い目で窓の外を見上げる。その先にあるのは空……いや宇宙書いてソラなのか。なんだか良く分からないが、微妙に不穏な空気を感じる。

「君のことは信用しているよ。私がスカウトしたのだからね。だがしかし、世の中には絶対というものは無い。それは分かってくれかね？」

「あ、あのー社長……」

不穏な空気と、目に見えない何かが渦巻いている。それは主に社長の方からやってきて、オレに注がれている。背を向けた社長の顔は見えない。今どんな表情をしているのか。窓ガラスに映ったそれを見れば分かるのだが、その勇氣は無かった。

あー、なんとなく分かった。まあアレだ。一つ屋根の下に男女が二

人。あとは分かるな？

「あのー社長。オレの新人とはいえプロデューサーですからその辺りは弁えています。それにオレも大人ですから、子供には興味ないですよ」

「そ、そうか……う、うむ」

さらっとしたオレの口調に、社長は振り返って安堵のため息をついた。不穏な空気と見えない何かは霧散していた。しかし微妙な困惑というかシヨンボリとした表情も浮かべている。複雑な親心というやつか。

社長を安心させてから社長室を出たオレだったが、ドアをくぐった途端再び目に見えない何かが叩きつけられた。それは殺気にも似た何かで、オレは思わずひるんだ。

「お……お前たち、なぜここに！？」

「……子供で悪かったな」

途中まで見送ったはずの響がジト目でオレを睨み付けている。制服姿だから学校に向かって、引き返してきたということか。響だけでは無い。あずささんや伊織、春香たちがドアの外でオレを待ち受けていた。

「ちよつと！ 仮にもこのスーパーアイドル伊織ちゃんに向かって色気が足りないってどーいうことよっ！」

いや色っぽいかいという話していないし、そもそも伊織に向かっては言っていないだろーって話聞いてくれ。

「へえ〜プロデューサーってこういうの興味ないんだー」

美希が胸元を寄せて微笑を浮かべる。それは小悪魔的で確信犯的な笑顔であり、つまりからかっているだろお前。どちらにせよ見たら負けだ、見たら……。

「響ちゃんのことがちよつと心配で寄ってみたんですけど……興味ないとか言われるとアイドルとして自信なくしちゃうかなーって、あはははっ」

春香が少し暗い笑いを浮かべる。いや、ちよつと待て。そういう意

味じゃなくってだな。くそ、どう答えても墓穴が見える。

「あらあら、私たちは対象外なんですねえ。それはそれで少し寂しい気がします」

あずさん、あなたは対象外の対象外です。それにちょっと嬉しそうにしていますが、子供扱いと若く見えるのとは違うと思います。

この後しばらく。具体的には律子が出勤してくるまで、オレを弾劾する女子トークが続くこととなった。

「ワニ？」

ちよつとオカマ口調のディレクターが驚いた声を出す。オレよりも高い背でオレよりも筋肉質。そこから繰り出されるオカマ口調。なんとというか、本当にこういう人っているんだなというのが素直な感想である。例えるなら街中で白馬の王子様に出会った感じである。そして、それらの眼前にあっても不自然なことは何も無いかのように振る舞うのがプロの営業というものである。オレ、自然に笑えているよな？　なお営業以下略で宜しく。

午前中、オレは某テレビ局に来ていた。勿論営業、売り込みの為である。全国ネットのテレビ局のディレクターで会ってくれたのはこの人が初めてである。まあ宣伝材料写真や資料を渡すだけで仕事が取れた訳ではないが、門前払いだった頃に比べたら格段の進歩である。一通りの話を終えた後、思い切ってマンションのことを相談してみた。このディレクター、動物番組を手掛けているのだ。

「さすがにちよつとワニはねえ……小さいの？」

「いえ、かなり大きいです」

「……飼育許可とか、ちゃんととってるんでしょうねえ？」

「は、はい……」

た、たぶん。そうでなければ沖縄から連れてくること自体できないだろうからな。……そう信じていいよな？ な？

「は虫類とかオツケーの場所なら結構あるわよん。でもワニねえ……」

ディレクターは腕組みをしてしぶい顔をしている。その腕組みは、足に例えるなら内股である。

「あなたがワニ飼っているわけ？ 見かけによらないわねえ」

「いいえ、オレじゃなくってうちのアイドルが」

ディレクターは目を丸くした。そりゃそうだよな。

「ちなみにどの子？」

「ああ、えつとこの子です」

書類の束の中から、響の宣伝材料写真を取り出して見せる。

「へえ、まあ快活そうだから動物飼ってそうな感じだけど、ワニとはねえ」

「あとハムスターと犬とモモンガとヘビと……」

ああ、また目を丸くした。

「了解よ。もしあつたら連絡するわね。まあ期待しないでいてね」

「はい、よろしく願います」

手をひらひらさせながら立ち去るディレクターにオレは頭を下げる。話を聞いてくれただけでも御の字だし、このディレクターが『そういう人物』であるということが見れたことは隠れた収穫といえた。……オカマ口調ってところじゃないぞ。

昼休み。

響は屋上にいた。いつもは教室で友達とお弁当を囲んでいることが多いが（そして宿題を教えてもらう）、今日は屋上で一人でいた。なんとなく考え事があった。

『子供には興味ないですよ』

……自分、そんなに色気ないかな？

なんていうか、どちらかといえばボーイッシュな方だと自分でも思うから、女性としての魅力うんぬんと言われてもさほど関心はなかった。美希やあずさ、貴音みたいなのが「女性の魅力」って言うんだろうなと思う。自分はダンスが好きで得意だから、そういうアイドルになりたい。カッコイイ路線？ よく分からないけど、そういう感じた。うん。

腰に手を当て、ちょっと胸を持ち上げる。うむ、運動しているだけあって引き締まっているな。しかしなんか胸回りは少し……減ったか？ 去年はもう少しあった様な……いやいや！ そんなことはない、あるわけがない。育ち盛りなんだ、増えることはあっても減るなんてことはないだろう。ま、まあ誤差というやつだな、うんうん。

身長は少し低い方か。もう少し背と手足が伸びれば、もっとダンスの幅も広がるな。どっちにしてもまだこれからである。今でこれなのだから、むしろ自分将来は有望だと思っただけだな。美希ぐらの胸になる可能性だって……いやしかし、あんまり育つのも邪魔になるか？ うーん。

『こつこの興味ないんだー』

う、うがぁー。素直に羨ましいと思ってしまっ自分がある。やっぱりなんか、ショックだ。理由は分からないけど、やっぱり女性らしさ的な部分の何かが自分には欠けているのか、そうなのか。

アイドルになる為に沖縄から上京した理由は、もちろんアイドルになったかったからだ。ダンスの腕も沖縄のスクールでは一番だったし、それは東京に来た今でも自信がある。それは今でも変わらない。

でも、それだけじゃ足りないのかな。

未だに無名アイドルから抜け出せない自分。それは厳然とした現実だ。このまま芽が出ないまま終わっちゃうのかな。そう弱気になることもある。

でも負けられない。自分はただアイドルという夢を叶える為だけにここにいる訳じゃない。今は母親に仕送りしてもらっているけど、アイドルとして成功すればその必要はなくなる。早く自立したい自分にとって、アイドルという「仕事」は夢と両立できる魅力的な未来でもあるのだ。

だから。

アイドルとして必要なものがあるのなら、自分はそれを身につける必要があるのだ。

何をするにせよ、情報は必要である。

この場合の情報とは方向性を決める為の指針になるものである。「女性らしさ」というのは曖昧過ぎる。もっと具体的なイメージが必

要だ。

学校が終わると、響はプロデューサーのマンションに直行した。まだ陽が傾く前。合い鍵で部屋の中に入ると、家族たちの出迎えを受ける。当然というか、プロデューサーの姿は無い。響は餌を用意してから『探索』を開始した。

まずは本棚。小さなカラーラックには難しい本と数冊の小説と漫画本しかない。ここにはテレビの他にDVDプレイヤーもあるが、肝心のディスクの方は見当たらない。

「ここまでは予想通りか」

ここまでは予備調査。響はいよいよ本調査に入る。ベッドの下……何も無い。

台所の下戸棚の奥……醤油瓶しかない。

天井裏……は、そもそも開かない。

「うむー、おかしいなー」

響は頭を捻る。確か伊織の話だと、今探した所のいずれかにはグラフィック雑誌とかエロ本とかが隠してあるハズなんだが……。念の為ハム蔵にも室内を探索させたが、何も出てこなかった。

「まさかプロデューサー……」

ホモ、なんだろうか。自分たちのこと、子供だから興味ないって言うていたけど、本当は……。い、いや別にいいけど。うん、人の趣味はそれぞれさー。はははっ。

その時、響の携帯電話が鳴った。

慌てて鞆の中から取りだし、通話ボタンを押すと聞き慣れた声が響いた。

『響、今どこにいる？ 学校は終わってるよな』

「あ、ああプロデューサー。今はプロデューサーの家にいるさー」
少し声の上擦る響。いや別にやましいことはしていないし、別にプロデューサーの趣味がそうだと決まった訳じゃない。

『じゃあ今からテレビ局に来れるか？』

「……！ も、もしかして仕事か？」

『えっ？ あ、ああゴメン仕事じゃないんだ』

「えー、そーなのか」

ぬか喜びに肩を落とす。

『でも、もしかしたらワニ美が住めるマンションが見つかるかも知れないんだ』

「あら、この子が響ちゃん？」

急いでテレビ局にやってきた響を出迎えたのはプロデューサーと、初めて見る男性だった。テレビ局のディレクターだと紹介され、挨拶をする。

「が、我那覇響です。宜しくお願いするさー」

「うふん、なかなか可愛い子ね。写真より断然良いじゃない、気に入ったわ」

「は……はははっ」

オカマ口調の洗礼を受け、響は引きつった笑いでプロデューサーの方を見た。

「どうした響？ 体調でも悪いのか」

「い、いや、そんなことはないぞ……」

「……なぜ後ずさる？」

「う、うん、人の趣味はそれぞれだから、気にする必要はないぞっ」
「何を言っているんだ、何を」

プロデューサーが自らのホモ疑惑を晴らすことになるのは、もう少し後のことになる。

第六話 その夢の形は（後編）（前書き）

「THE IDOLM@STER」アイドルマスターはバンダイナムコゲームスの原作・著作物であり、当作品はその二次創作小説です。作品中の諸設定はテレビアニメ版を参考にしておりますが、公式設定とは一切関係ございませんのでご注意ください。

第六話 その夢の形は（後編）

「どうかね律子君。この企画書は」

一通り書類の束に目を通した律子に、高木社長が聞く。照明の灯った社長室には社長と律子の二人のみ。ドアの外、事務所の方からは小鳥や春香たちの談笑の声が小さく響いてくる。仕事やレッスンを終えて各々帰宅し始めるまでの時間、事務所は賑やかになる。

その賑やかさは、今の社長室には無い。それはドア一枚隔てているという、距離的な理由ではない。一つの企画書が、それを読んだ二人がその張り詰めたな空気を作り出しているのだ。

律子は口を開き、しかし上手く言葉に出来ずに閉じる。それを幾度か繰り返して、結局無難な言葉でお茶を濁した。

「……正直、戸惑ってます」

「戸惑う、かね」

「はい。ずばり言ってしまうえば『時期尚早』なんです、でもそう言い切ってしまうには躊躇いを感じます」

「ほう」

社長は律子から返された書類の束を、斜め読むようにそのページを捲っていく。

「まあ私も戸惑ってるよ。例えるなら、葡萄を栽培する前にワイン工場を作るようなものだからね」

「そうですね」

高木社長の例えは正しい。ワインを作るのに葡萄と工場が必要だが、その葡萄がきちんと実る目途すら立っていないのに、工場だけは立派なものを建て始めようという話なのだ。

彼は焦っているのかしら。

律子はそう考え、しかしすぐに否定した。確かに竜宮小町のデビューに触発されたのか、少し前の彼は焦っていた。その為に幾つかの失敗もした。でも、だからこそ今は焦りからは解放されていると思

うし、現にあれ以降目立ったミスはしていない。

彼は、葡萄は必ず実ると信じている。だからこんな企画書を作ってきたのだ。

社長も律子も「時期尚早」という点では一致している。そして、その答えに躊躇いを感じている点も。もう少し待とう、それがベターなのは確実だ。しかし……。

「幸いというか、まだ時間はあるのだからね。また明日にでも意見を聞かせてほしい」

「はい、今晚じっくりと考えてみます。」

「うむ」

そうして今日の所はお開きとなった。社長室を出た律子は、事務所のソファで談笑している輪に加わる。テレビ局に行っている響と彼、プロデューサーはまだ戻ってきていない。もう少し待ってみて、戻ってこない様であればみんなを帰宅させるつもりだった。

我那覇響は、沖縄のアクターズスクール出身である。アクターズスクールとはつまり広義の芸能人養成所のことであり、ダンスや演劇、アクションなどを教えて次代のタレントを輩出することを目的としている。

響はそこでアイドルとしての基礎を学び、東京へ出てきた。未成年のアイドル候補生であればアイドル事務所にスカウトされてから上京するのがセオリーだが、響は何のアテもないままに東京へ出た。まあ結果的には、東京に出てすぐ高木社長にスカウトされることになるのだが。

コーチたちには「もう少しレッスンを重ねて、アイドル候補生としてスカウトされてから上京した方がいい」と言われた。至極真つ当な助言である。そうしなかったのは、家庭的な事情等々の理由が大きい。大きい。それが最大の理由では無い。

響は、証明したかったのだ。あのコーチたちの自分を見る目を見返して、自分は充分やっていける、と。

『なんでそんなこと言うんだ？ 自分は立派にやっていけるぞ！』

それから半年。

今、響はテレビ局の中を歩いている。広い廊下が直線的に続いていて、脇には機材や大道具小道具が無造作に置かれている。そしてたぶん十メートル間隔ぐらいに大きな扉が左右に並んでいる。収録スタジオへと続く扉だ。ある扉は開放されたまま、慌ただしく人が出入りを繰り返していて、ある扉は固く閉ざされていて扉の上に赤いランプが点灯している。

独特の喧噪と空気。響はひどく場違いな感じがして、歩く速度を速めた。前には見慣れたプロデューサーの背広がある。そのプロデューサーの前には、さっきのオカマ口調のディレクターが歩いているはずだ。今響とプロデューサーは、そのディレクターの手掛ける動物番組が収録されているスタジオに向かっていた。

「どうした響？」

プロデューサーが歩きながら顔だけこちらに向ける。はっと顔を上げる。あれ、自分今俯いていたか？

「い、いや何でもないさ」

慌てて顔を上げる。そしてニツと笑ってみせる。プロデューサーはそれを見て、何も言わずに前に向き直った。今ので誤魔化したかどうか。弱気は、見せたくなかった。

周囲の喧噪が遠く感じる。

自分、落ち込んでいるな。そう実感した。例えば、祭の喧噪が賑やかであればあるほど寂しくなる時がある。それは、自分がその輪の中にいないからだ。

つまりは、そういうことだ。今自分はテレビ局にいる。それはアイドルとしてではなく、いわばお客さんとして訪れているだけだ。視聴者やファンであれば、テレビ局の裏側が見れたと喜ぶところなのだろう。でも自分は、アイドル……になる為に上京したのだ。

喧噪が大きくなればなるほど、響の心は暗く沈んでいくのだった。

動物番組の収録スタジオでは、ちよつとした騒ぎになっていた。

「ちよつとちよつと！ どうしたのよん」

「す、すみませんディレクター。少し手違いがあつて……」

ディレクターがスタジオの中に入っていくと、アシスタントらしき人物が駆け寄って状況を説明し始めた。響とプロデューサーはスタジオの入り口で待機する格好になったが、こういう騒ぎの原因に関しては何となく分かった。

スタジオの中を、動物たちが元気よく闊歩している。その動物たちを追いかけるスタッフたち。戸惑う飼い主たち。つまり、動物番組に出演予定だった動物たちが逃げ出しているのだ。しかしまあ、一匹二匹ならまだしも、ざっと見たところ出演予定の動物たちの殆どが自由を謳歌している。一体どういう手違いをすればこういうことになるんだか……。

「いやしかし、こりゃ参ったな」

オレは困った顔で頭を？いた。今日ここへ来た目的は、響の家族た

ちの新しい住まいの件で有望な情報があつたからだ。この動物番組に出演予定の飼い主さんの中にワニを飼っている人がいると、ディレクターから連絡が入ったのだ。ワニ飼育オツケーな物件について何か話が聞ければ……と思ったのだが。

「ごめんなさいねえ。落ち着いたら紹介するから、ちょっと待っててくれる？」

「あ、はい」

ディレクターはそういつて、またスタジオの中へと戻っていく。スタッフに指示を飛ばして、逃げ出した動物たちの捕獲していく。しかし大きな動物は兎も角、小さい動物たちには手を焼いている様だ。

「みんな大変そうだな、プロデューサー」

「そうだな……つて、響？」

「ん？」

響が首をかしげる。身体の前で組んだ腕の中には、カピパラがもきゅもきゅと口を動かしている。

「それ、どうした？」

「今友達になった。カピ太郎だ」

いや名前を聞いたんじゃないんだが。というか、足下にも何やら動物たちが擦り寄っている。えつとタヌキにキツネ、あとなんかネズミ系のほ乳類もいる。動物たちを捕まえようと四苦八苦している人間たちを、その動物たちは響と一緒にのほほんと眺めている。えつとなんだろう、この構図は……。

「とりあえず響、それ飼い主に返してもらえるか？」

「えー」

折角友達になったのにー、と響は少しぶーたれながらもスタジオの中へと入っていく。どの子がどの飼い主なのかは分からなかったのでディレクターに声を掛けて、カピ太郎をずっと差し出す。ディレクターは一瞬目を丸くしてから、にっこりと微笑んだ。

「あら、ありがとう。動物いっぱい飼っているんですって？ さすが手慣れたのね」

「あんまり追いかけて回してもダメだぞ。面白がって余計逃げるだけだ」

響はカビ太郎を飼い主に手渡し、キツネやタヌキたちをケージに入れるのを手伝う。それが終わると、まだ逃げ回っている動物たちの捕獲を手伝う。

とはいっても、響のそれは捕獲という語呂からは遠くかけ離れていた。スタッフたちが右往左往する中、テンポよく小走りしながらスタジオを巡っていく。階段状の大道具をリズム良く駆け上がり、その裏にジャンプして消える。大道具の影から出てくる時には、響の足下には一匹にフィレットが纏わり付いて一緒に走っている。その進行方向からは大型犬が走り込んできて、ぶつかる様に飛びかかって響にじゃれつく。響がスタジオを巡るだけで、その周囲には動物たちが集まってくるのだ。

ディレクターは感心した様子で響を見ている。

「……うちのスタッフちゃんも動物の扱いには慣れているつもりだけど、ちよっとびっくりしちゃうわね」

「そうでしょうねえ」

オレも未だに夢を見ているんじゃないかと思う時がある。例えばハム蔵と会話したりとか、いぬ美と喧嘩したりとか。そういうレベルだからなー響は。

ふと響が立ち止まり、天井を見上げている。

スタジオの天井は高い。鉄骨の柱が幾つも張り巡らされていて、照明器具などがつり下げられている。その鉄骨の柱の上に、逃げ出した最後の一匹であるリスがいた。

見つめ合うリスと響。ゆっくりと響が手を上にさしのべる。リスは動きを止め、じっと下を見ている。それは響の方を見ている様にも見えた。

「……まさか、本当に通じ合っているっていうの……？」

ディレクターもさすがに驚きの声を漏らす。人と動物の明確な意思疎通。ある種の夢のような出来事が、今行われている。そう見えた。

スタッフや飼い主たちも気がつき、固唾を吞んで見守る。

結末は劇的だった。

『むきゅー!』

鳴き声と共に鉄骨の上を疾走する小さな影。それがハムスター、つまりハム蔵であることが分かった時には響たちの作戦は終了していた。響がリスの気を引いている間に、ハム蔵がリスに後ろからタツクルしたのだ。タツクルされたリスは鉄骨の上から落下し、それを響が差しのばした手でナイスキャッチする。

「よしっ!」

ガッツポーズを取る響。リスが何かに抗議する様に、響の手の中で暴れている。まあなんだ。本当に通じ合っていたなら騙し討ちした様な者だからなあ。リスの気持ちも分からなくない。通じ合ってなくても人に捕まったのだから暴れるよな。……えっと、本当のところはどつちなんだ?

「……なんか期待してたのと違うわね」

拍子抜けした感じでディレクターが呟く。オレは乾いた笑いで相槌を打ち、誤魔化すことにした。

「手伝ってくれてありがとだね。すごい助かったわ」

「いえいえ、こちらもいい人紹介してもらって感謝してます」

動物脱走事件も一段落し、撮影が再開された。慌ただしくなるスタジオの片隅でその様子を眺めているとディレクターが声を掛けてきた。

先程ディレクターから今日集まっている飼い主の一人を紹介してもらった。初老の女性で、事情を説明するとワニの飼育が丈夫なマシヨンを知っているので紹介してくれるという。先程の騒動で響のことを気に入っただのか、少し離れたところで響と話している。

まあ実際に引越するまでには多少時間がかかるだろうが、これで響

の住居問題も解決したといっているだろう。案外早く解決して安心である。

「ねえ」

横に並んだディレクターが、オレを肘で突く。その視線の先には、響がいる。

「たぶんあの子。あと数年したらすごい美人になるわよ」

唐突な話に、オレは思わずディレクターの方を振り向く。あれ？

ここは動物云々の話じゃなくって？

「もうちよつと背が伸びて、すらりと手足が伸びるでしょ。そしたらかなり有望よ」

「はあ」

……あんまりピンと来ない。というかすらりと伸びた響がイメージ出来ない。オレって想像力貧困なのかな……。

「今からモデルの仕事、しておくのも悪くないと思うけど」

「モデル、ですか」

これもまたイマイチ想像できない。カメラの前でじっとしているイメージが、ねえ。モデルといえば美希とか貴音とかの方かな、イメージ的には。

「てつきり動物関係の話をされるものかと思ってました」

「ふふふ、まあそれもあるけどね」

ぽんと肩を叩き、ディレクターが離れていく。スタジオの中へと歩いていき、指示を飛ばす。

「ま、もしその気になったら連絡ちょうだい。いいトコ紹介してあげるわよ」

番組の撮影が本格的に始まる。オレは、初老の女性との話が終わるのを待ってから、響と一緒にスタジオを後にした。

外はもう暗くなっていた。星の見えにくい東京の空で、月だけが煌々と輝いている。

テレビ局の建物を出た所にあるロータリーにはタクシーが何台か停まっっていて、プロデューサーはその一台に乗り込み、響もそれに続く。自動ドアが閉まると外界の喧噪から切り離され、エンジンとラジオの音だけが狭い空間を満たす。車窓が流れ始め、響はぼんやりと見つめている。

『今度、ウチの動物番組出てみない？　ちょい役だけど、響ちゃん動物の扱い上手いから、結構イケると思うわ』

スタジオから出る時、オカマ口調のディレクターから声を掛けてもらった。そういえば直接声掛けしてもらったのって初めてか？　そんな気がする。

「そういえばあのディレクター、モデルやってみないかとか言ってたな」

「モデル？」

モデルってあれか。グラビアとかそういうやつ？

「そういうのは美希かと貴音とかじゃないのか。まあ写真撮られるのは結構好きだけだな」

そうだな、嫌いじゃない。あまりじつとしているのは苦手だけど、こないだの宣材写真の撮り直しの時は結構面白かったし。そういうのをやって見るのもいいかも知れない。でも……。

「……ねえ、プロデューサー」

「どうした？　響」

数瞬の沈黙。短い様で長い、その間。響は一息ついてから続けた。

「自分、アイドル向いてないのかな」

吐き出す様に言った。言って気がついた。落ち込んでいる自分、それは自信を無くしている自分だということに。

「響はダンス得意じゃないか。あれは大したものだと思うぞ」

「そりゃダンスは得意さ。でも……一番じゃない」

世の中上手い人はいくらでもいる。もちろん練習を重ねていつかは自分がトップになる、という気概はある。でも今は？

『我那覇さん、確かに貴方のダンスは大したものだわ。でも、もっと上手い人は幾らでもいるし、それだけでアイドルやっていけるものでもないわ。そんなに焦らないで、じっくり練習してからでも遅くはないと思うわ』

昔誰かに投げ掛けられた言葉を思い出す。その自慢のダンスで仕事の話が来たことがあっただろうか。勿論動物好きだし、まあモデルも興味が無い訳じゃない。そういう仕事も楽しいと思う。でもやっぱり自分の一番の中心はダンスで、それがダメなんだとしたら、何に自信を持っていいいのか分からなくなってしまふ。

「響は今でも充分魅力的だと思うぞ」

「ダンスで一番じゃないのか？」

「響のダンスは、一番じゃないとダメなのか」

「そりゃ、ダメじゃないけど……」

狭い車内でプロデューサーは響の方に向き合い、その眼鏡越しにじっと目線を合わせてぐつと拳を握りしめて言った。

「安心しろ、響は充分アイドルしているよ。オレが保証する」

なんてヒドイ台詞なんだろ。

よくよく考えてみたら、ただ信じているって言うだけじゃん。

もう少しこう、具体的な理由を添えて言えないものかなー。そ

う思う響の口元は、綻んでいる。

ああ、そうか。

プロデューサーは、自分たちのことを何一つ疑っていないんだ。自分たちのアイドルとしての魅力に、ほんの一欠片の疑いをもっていない。アイドルとしてどんな魅力があるかは具体的に言えないくせに、でも魅力的だと言い切ってしまう。それは今までの多くの大人たちが自分に向けてきた視線とは正反対のものだ。

ワニ子のこととでマンションを追い出された時、響は自然とプロデューサーを頼っていた。なぜプロデューサーだったんだろう？それが響には不思議だった。ちょっと前の自分だったらありえないし、今でも別に頼れるところは幾つもあるのに。そういえばやよいの弟が家出した時も、伊織はプロデューサーに電話してたな。

その理由、どうしてそうしたのか、今なら分かる様な気がする。

「そっか。まあ今日の所はプロデューサーの言うことを信じることにするぞ」

「そうだぞ。仕事は……ま、まあもつと入るように頑張るからな」

「期待しているぞ、プロデューサー」

だから自分は、頑張ろう、と思った。

いや前々から頑張っているんだぞ。それとは別に、なんか別の頑張りが。そういうもの、だ。見てくれている人がいる、それが何より励みになる。そう実感した。

「まくとうそーけ、なんくるないさー、だな」

「……よく聞こえない。何か言ったか？」

「ううん、なんでもないさー」

テレビ局から一度事務所に寄って、そのままタクシーでマンションへと帰宅した。マンション前の道路で停車し、先に響を下ろして支払を済ませる。丁度その時だった。

携帯電話の呼び出し音が鳴った。

液晶画面に表示された電話番号には見覚えがない。はて？　と思った瞬間に相手のことを思い出し、慌てて通話ボタンを押す。

「もしもしっ！」

「よお、まだ仕事中か？　仕事熱心だねえ」

電話の向こう側の人物は男性だった。少しトーンの低い、若いようでもあり年寄りの様にも聞こえる、年齢不詳の声。ここ数日、オレはこの人物からの電話を待っていたのだ。

「あの、ビデオは見ていただけましたでしょうか？」

「ああ、見た。ヒドイ」

ズバリと何の躊躇いも容赦もなく無く切り捨てる。思わず携帯電話を握る手に力が籠もる。先日、電話の主に手渡したビデオ。それはオレが入社時にカメラマンとして撮影した765プロのアイドルたちのドキュメンタリービデオだ。

「お」

「声は掛けておいた。連絡先はあとでメールをしておく。電話して、オレの名前だせば、まあ融通してくれるはずだ」

反論しようとしたオレの声を遮って、相手が畳み掛ける。その言葉の内容を理解する前に、更に相手は続ける。

「結果を出してくれ。以上だ」

そしてこちらの返事を聞くまでもなく、一方的に通話は切断された。間髪入れずにメールの着信音がする。メールを開くと題名は無く、本文に名前と電話番号だけが何件か列挙されていた。

なんともせわしない人物だ。その畳み掛ける対応に苦笑しつつ、オレは少し興奮していた。いやビデオの内容をヒドイと切り捨てられた時はどうしようかと思ったが、何のことは無い。あの人物は、

少なくとも765プロのアイドルたちに興味を持ったのだ。でなければこのメールが届くはずがない。このメールは、今のオレには喉から手が出る程欲しいものだった。

メールに列挙された連絡先は広告代理店、イベント作成会社、施設の管理運営会社などなど。それらの窓口となっている担当者の連絡先だった。しかも単なる窓口ではない。組織内部のそれなりに決裁権を持つ人物の、である。この人脈、コネとっていい。それは今オレがやろうとしている計画には、無くてはならないものだった。

765プロ、その所属アイドルたちが総出演するファーストライブ。

その開催に向けて、一歩が踏み出せた瞬間だった。

第七話 ファーストライブ（前編）（前書き）

「THE IDOLM@STER^{アイドルマスター}」はバンダイナムコゲームスの原作・著作物であり、当作品はその二次創作小説です。作品中の諸設定はテレビアニメ版を参考にしておりますが、公式設定とは一切関係ございませんのでご注意ください。

第七話 ファーストライブ（前編）

「無尽合体キサラギ」というマイナー番組がある。

竜宮小町のデビュー以来、この番組の視聴率も少しずつ上向いているという。予算の関係からこの番組には長らくオープニングとエンディングが存在しなかったが、これを機に竜宮小町にオープニングを歌ってもらおうという話が出ているそうだ。ちなみにエンディングは内定していて、春香のあの曲である。

主役ロボのキサラギのライバルロボといえばアズサイズである。番組シリーズ初期の敵ロボットメカであり、キサラギの絶対防御装甲とアズサイズの巨大ミサイルの対決は番組屈指の名シーンである。本放送時はゆっくり飛んでいくミサイルであったが、最初に撮影した時はペットボトルロケットを利用していた。水の圧力で飛ぶアレである。もっともこれはお蔵入りになった。実際に飛ばしてみたらあまりに威力がありすぎて、キサラギの胸部装甲を突き抜けて轟沈という結末になってしまったからだ。設定上は装甲だけど実際にはダンボールだからなあ……。

お蔵入りといえば、アズサイズ以前にキサラギのライバルロボとして出演予定だったロボットがあった。伊織をモデルにしたイオリンである。

アズサイズが胸部の対比によってライバル感を出していたのに対し、イオリンにはキサラギと同時期に開発されたという絶対反射装甲を装備しているというのがライバルロボとしての売りだった。絶対防御装甲はあらゆる物理攻撃を滑らせることによって防ぐが、絶対反射装甲はあらゆる光線系の攻撃を反射する攻防一体の装備であり、それはイオリンの額部分に設置されていた。

意外と良いアイデアだと思うのだが、結局日の目を見ることはな

かった。

イオリンのダンボールモデルが完成した翌日。伊織はスタジオの外で、夏だというのにダンボールで焚き火をしていた。伊織はその焚き火を、何か廃棄物を見るかのような視線で見下ろしている。その横ではなぜか正座している自称監督。いや、させられていたのか。自称監督が伊織に対して敬語を使う様になったのもそれ以降の話だが、事情を知る者の間では「空白の五分間」と呼ばれてる。伊織が何か失礼なことでもしたのかと心配したが、自称監督はちよつと嬉しそつだったので、そつとしておくことにした。人間、知らないことが良いものがあるのだろう。

今回の話は、特撮モノにはよくある、悪役が幼稚園児たちを誘拐するというものである。世界征服を目指す悪の結社は、いつの時代も基本を大事にするということなのだろうか。やよいが演じる悪の幹部が園児達を攫い、亜美と真美が追跡する。児童公園に追い詰めるが、そこでまさかの展開。やよいに懐いた園児達が離ればなれになるのを嫌がつて泣き出し、更にはやよいと共に闘うことを決意する。さすが天使、さすが園児達のカリスマ。感動的なシーンである。話はグタグタだが。

自称監督は調子に乗って、台本をその場で書き直している。やよい天使が正義に目覚め、実は亜美真美が悪の手先だったのだー。いいのか、そんな勢いだけでシナリオ変更して。目が点になっている亜美と真美。それはまあ、そうだろうなあ。でも意外と嬉しそつだ。

果たして亜美真美は主人公の地位を守ることが出来るのか。次回に続く。

建物の中は喧噪と歓声に包まれている。いや、歓声が勢いよく吹き流れてくるといった表現の方が正しいか。表のステージに繋がる通路の向こうから、絶え間なく響き流れてくる。アイドルの歌声と観客の歓声がリズム良く交じり合い、周囲を昂揚させる独特の雰囲気を出させている。

オレはそのステージの裏方、大道具やスタッフが慌ただしく行き交う通路の途中にいた。ステージで開催されているライブ、それを裏で支えるスタッフの一人としてだ。控え室から小道具を持ってくる様に指示され、それを持っての帰り道だった。

「……お前……ここで何をしている……？」

「いやあ、アルバイトですけど」

「アル バイト だと？」

通路の壁際で、眼鏡の男と眼鏡の男がにらみ合っている。眼鏡の男は眼鏡の男を壁際に押しつけて睨んでいる。睨まれている方は少し気まずそうな顔でぎこちない微笑みを浮かべる。……あー、えっと。二人とも眼鏡だったか。妙な共通点であり嬉しく無い様な。

眼鏡男の内、壁に押しつけられているのはオレであり、睨み付けてくる方はこだまプロのプロデューサーだ。そう、あのオールバックの、新幹少女のプロデューサーである。

ここは、新幹少女のライブ会場だった。ステージではあの三人娘たちが大勢の観客相手に堂々とライブパフォーマンスを見せているのだ。

「どうやって潜り込んだ？」

「潜り込んだというか、ちょっと知り合いにお願いして入れてもらったというか……」

こだまプロの額が険しくなる。まあ気持ちは分かる。この御仁とは、先日のアイドル運動会で一悶着あったといえばあった間柄だ。

「知り合いって……み、水瀬グループじゃないだろうな……」

ステージからの歓声が一際高まって、オレたちの居る通路を吹き抜けていく。

「え？　なんて言いました。小さくてよく聞こえな」

「ああ、いいっ！　なんでもないっ！　気にするなっ！」

こだまプロは慌てたように手を振り、オレの言葉を遮断する。いや、ここのアルバイトは例の電話の主に紹介してもらったのだが……何か勘違いしている様な？

「別に居てもいいが、邪魔はするなよ！」

こだまプロはそう言い残して、ステージの方へと歩いていつてしまった。結局何の話だったのか、とりあえず追い出されそうにないことにほっとする。そして手にした小道具を思い出し、慌てて通路を駆け出すのであった。

新幹少女といえば、現在大変な人気を博している三人組のアイドルユニットである。カテゴリ的には新人アイドルということになるが、他のライバルより一歩抜きん出た存在だ。ヒット曲も多く、ライブはいつも満員御礼。東京ドームや武道館に最も近いと言われている。

ライブ。

言うまでも無いことだが、その開催には色々なものが必要となる。人、設備、金、などなど。人とはまずライブを見に来てくれるファンのこと。そして設備とはライブ会場とその運営スタッフ。そして金はズバリお金、ライブの開催費用である。ファンの数が多くなればライブ会場、箱も大きいものが必要だしスタッフも大勢いる。それに伴い開催費用も上昇する。

一般的にはライブの規模が大きくなればなるほど良いと思われるいるかも知れないが、一概にそうともいえない面がある。そりゃファンの数は多い方がいいに決まっているし、そうなりたいと思って全員頑張っている訳である。しかし規模が大きくなると、小さい時には発生しなかった諸問題が浮き出てくる。端的に言えば、関係する人数が増えれば、手法も変わってくるのだ。

例えば。

朝、仕事開始前に朝礼を行って注意事項を伝達するでしょう。「いつも使っているエレベータが午後からメンテの為に使えなくなるので、エレベータを使った搬入はそれまでに済ませる様に」という内容だとする。十人を相手に朝礼、伝達するのであれば容易なことだ。事務所に集まってものの五分程度で終了する。

これが二十人相手だとどうだろうか。765プロの事務所では手狭なので、場所を確保する必要がある。屋上とかであれば大丈夫か。場所の確保と、そこまでの移動時間。集合までにかかる時間。五分では難しい。十分は必要だろう。

百人では？ このビルでは一度に集合するのは無理だな。朝礼を数回に分けるか、別の場所を確保するか。必要な時間は一気に増大する。そして人数が多くなると別の問題が発生する。伝達事項が全員には伝わらないのだ。どんなに入念に伝達しても、聞いていないとか忘れたりする人が何人かは出る。必ず出る、絶対出る、出ないなんてありえない。ということ、それに対する対策も必要となる。

このようにスケールが違えば、手法も違ってくる。765プロは芸能事務所であり、ライブやコンサートの開催経験もある。しかし規模の話であれば、今回のスケールは「初」なのだ。経験が圧倒的に不足している。開催会場は、TOKYO EXCITE CITY HALL。収容人数は約三千人。765プロとしては未知の規模である。ぶっちゃけていえば、この規模のライブ運営経験は素人なのである。

そして更にお金の問題。

規模が大きくなれば運営費用も大きくなる。最終的にライブが成功すれば元金プラス利益が回収できるが、そのライブ開催の為のお金は最初に必要となる。ライブ会場の施設利用料金、運営スタッフの賃金、チケット販売等の販促費。ライブ規模が大きくなれば当然その費用も増大する。自他ともに認める弱小プロダクションである765プロの金庫はそれに耐えられるのか。

――そして何より、それだけのファンを集めることが出来るのか。

765プロにとって大規模なライブを開催することは長年の悲願でありながら、それに着手出来ずにいたのは、こういった理由からだった。

『アイドルとはつまり偶像だな。突き詰めると神格化にたどり着くのは、人類の歴史が証明している。アイドルに類するものが歌や踊りを伴うのも、人を引きつけるのにそれらが有用だからだな。まあ演説でアイドル化したものもいるが、その演説の抑揚や手振り身振りが歌や踊りに相当するという解釈が可能、か。』

「いや、そういう難しい話ではなく……」

『なにを言っている。そういう難しい話だろう？ 分かりやすく説明してやろう。例えばここに林檎があるとする。この林檎を増やしたい、栽培したいとなれば話は簡単だ。その手法を学べばいい。しかしだ、この林檎はどうして林檎なのだろう？ という問いであれば、それは哲学で難しい問題だ。君の質問は、後者だ。』

「……むづ」

『もっと簡単にいえば、林檎の栽培者は林檎の存在を問うたりしない。』

「ビジネスに徹しよ、ってことかよ」

『そういう道もある。選ぶのは君自身だ。』

「……」

『まあもう結論は出ているんじゃないのかな。歴史が証明している。アイドルは夢を見せる存在だ。それ以上でもそれ以下でも無い。君は難しく考えすぎなんじゃないのかな。』

「その夢の内容が分からないという話なんだが……」

『ふむ、もう私から助言することは何もない。あとは君次第だ。……と、まあこれだけだと不親切か。ヒントだけあげよう。『もう話は終わっている』。以上だ。』

ライブ開催の実務、裏方作業に奔走するのがオレや社長、律子や音無さんの仕事だとすれば、春香たちアイドルの仕事はレッスンである。

ファーストライブの為に用意していた新曲。そのレッスン。ライブの日程もほぼ決まった段階で、彼女たちのスケジュールはレッスン中心のものに組み替えた。まあ竜宮小町組だけはそうもないが、元々ミニライブ等の開催もこなしている彼女たちは練度でいえば一歩抜きん出ている。そういう意味では、やはり心配なのは竜宮小町組以外のメンバーである。

レッスンの中心はダンスとボーカル。

今のところダンスは雪歩とやよい、ボーカルは春香と真美が苦手としている様だった。今回の新曲は765プロのアイドル全員によるものだ。トリオやカルテットは今までにもあったが全員参加の曲は今回が事実上初めてだ。人数が違えばダンスやボーカルの合わせ方も違いが出てくるし、何より初めてのことなのだ。レッスン開始から日が経つと、個人による習熟度の差が開いていく。それで余計に連携が崩れていくという、一種悪循環の傾向が見え始めていた。ダンス内容のレベルを落とすか、春香たちの間で意見が分かれる。

オレはその練習をじっと見ている。

見ているが、口は出さない。本当は言いたいことはある。励ましたり、叱ったり。そもそもコーチがいるし、専門的な分野についてオレが口を出す理由はない。

しかし、つらい。いつそ声に出してしまった方が容易く、楽だ。ただ、人を信じるという行為がお互いの行く末を共有するということと同義なのだとすれば、オレが今苦しいのは彼女たちの苦しさの

表れだと言える。そう思えば、多少の苦しさなど問題ではないと強がれた。

ダンスの件は春香の発案で、もう少し頑張ってみようという線で落ち着いた。オレはそれを見届けてから、次の現場へと向かった。

第八話 ファーストライブ（中編）（前書き）

「THE IDOLM@STER^{アイドルマスター}」はバンダイナムコゲームスの原作・著作物であり、当作品はその二次創作小説です。作品中の諸設定はテレビアニメ版を参考にしておりますが、公式設定とは一切関係ございませんのでご注意ください。

第八話 ファーストライブ（中編）

「それにしても、かなり思い切ったことしたわよねえ」

オレから手渡されたチケットを眺めながら、オカマ口調のディレクターは呟いた。業界の人にファーストライブの話をした時の反応といえば、戸惑うか呆れるかのどちらかだ。ディレクターのそれは、戸惑いだ。

「エキサイトホールって言ったら三千人規模でしょ？ 無茶するわね、大丈夫なの？」

「ええ、まあ」

先日からチケットの先行販売が始まっている。竜宮小町のファンクラブを中心として売れ行きはまあまあだ。満員御礼になるかどうかは一般販売次第だが、そう悪い数字じゃない。

人気急上昇中の竜宮小町とはいえ、やはりファン数でいえば新幹少女が上となる。新幹少女が三千人規模のライブを開催するのは妥当だが、竜宮小町では箱を埋められないのでは？ というのが現在の客観的な評価というやつだ。そういう意味では思った以上に健闘しているといえる。少なくともチケットの売れ行き不振で765プロ倒産の事態は免れそうだ。

「あなたがチケット持ってきたということは、やっぱり他の子を見に来てってことなのかしら」

チケットをひらひらとさせながら、ディレクターが思わせぶりに微笑む。まあ業界の人にチケットを渡す理由は営業、売り込み理由以外に無い訳で、その点では正しい。オレが春香や響たち、竜宮小町メンバー以外を担当していることをこのディレクターは知っている。その程度の「仲」ではある。だからこのライブが、オレ的には竜宮小町以外のメンバーの為に開催する、と思っているに違いない。その見方は、ある意味正しい。でもそれだけでは足りない。

「ええ、是非見に来てください。でも765プロのアイドル全員の

ことを見てください。その為のファーストライブなんです」
掛け値なしの本心を語り、オレは一つ頭を下げた。

大規模なイベントを開催するに当たって、全てのスタッフを自社で用意するということは意外と少ない。とオレは思う。会場の設営スタッフや警備員はやはり外部委託になるし、会場外の仕事、チケット販売や販促などもそれを専門に手掛ける会社に任せた方が効率的だ。

ライブの中核スタッフに関しては、プロダクションの規模に寄る。例えば会場の音響スタッフや各所との連携や指示を飛ばす本部スタッフ、また開催前からライブの計画を練る部門のスタッフなどなど。765プロでは三人、社長含めても四人しか用意出来ない訳で、どう頑張っても外部の協力が必要になる。今回業務を依頼したイベント運営会社のスタッフは三千人規模以上のライブ開催経験があるので、その点では非常に頼りになる布陣となっている。

実はこの点は、ファーストライブ開催の一番のネックとなっていた部分だった。765プロはご存じの通り小所帯なので、ライブやイベント開催の時にはイベント運営会社に業務を依頼している。しかし基本小規模なミニライブがメインなので、付き合いのあるイベント運営会社も小さいところが多い。つまり、三千人規模のライブの業務を担えるところが無かったのだ。

この問題を解消したのが、例の電話の主の口添えだった。大きいイベント運営会社にいきなり出向いて行って、そんな経験もないプロダクションが「三千人規模のライブをやりたい」といっても誰も

相手にしてくれない。実績も信用もないからだ。その部分を、電話の主の口添えがカバーしてくれたのだ。ついでに言えばイベント会場の予約も同様だ。まったくもって、電話の主には頭が上がらない。この様に周りの人々に多大なる協力を仰ぎながら開催準備が進んでいるファーストライブだが、やはり中心となるべきは765プロである。実務的な部分はお願いとしても、イベントの方向性などを決めるのはやはりオレたちで決定する必要があるし、そこまでも任せてしまつては誰によるライブなんだか分からなくなつてしまふ。

新幹少女のライブにアルバイトで参加したのも、付け焼き刃でもいいから同規模のライブを実際に経験しておきたかったからだ。スケールが違えば手法も異なる。それを少しでも感じておきたかった。ライブの名称については、運営スタッフとの間で大きく議論になったところだ。運営スタッフ側からは、今人氣が急上昇している竜宮小町を前面に押し立てる案を提示してきた。営業的に至極妥当な案だ。そして恐らく、来場するファン層も竜宮小町のファンが大多数になるだろう。しかしオレは、あくまで765プロ全員によるライブであるという点を強調し、押し通した。

「765PRO ALL STARS」のファーストライブ。それこそが、765プロのみんなにとって大きな意味を持つのだから。

今オレは、繁華街を走っていた。

昼下がりの午後、人通りが増えてくる。その中を、複雑に小道が入り組んだ街を右へ左へと走り回る。

なぜ走っているのか？ それは簡単な答えと難しい答えの二つがある。難しい答えは、人は何かの代償行為を為に走ると言うことを選択することがある、ということであり。そして簡単な答えは、美希を探している、ということだった。

彼女たちを信じる。

なんて大層なことをいっておきながら、大ポ力をやらかしてしまう。美希が練習に出なくなった。

まったく人は完璧とは程遠い。こうなった原因は至極簡単なことであり、もし過去に戻るのなら自分自身の横顔を殴ってやりたい気分である。かなり前の自分と、ちよつと前の自分の二カ所ほどを。BGMは「明日の承太郎」辺りで。まあ実際にそれは出来ない訳で、だから走っているといえなくもなかった。

時間は一時間ほど前に遡る。

その頃オレは、美希の通う学校にいた。正確には正門前からは少し離れた木陰にである。今日日、大の大人が仕事もしないで中学校の正門前にいたらかなりの高確率でお巡りさんのお世話になる時代である。出来るだけ目立たないところから、正門から下校する生徒たちをじつと見つめる。

……離れていても相当に怪しい行動だが、背に腹は替えられない。お巡りさんのお世話にならないことを祈りつつ、じつと目的に人物が出てくるのを待った。

美希が練習に出なくなってから数日が経過していた。

律子にライブの準備を任せて美希を捜しに出た訳だが、東京は広い。

闇雲に捜して見つかる訳もない。つい先日電話した時は「お魚屋さん」に居るとか言っていたが、皆目見当がつかない。……築地のこ
とじゃないよな？

そこで美希の通う中学校に來たという訳だ。丁度授業が終わった頃なのか、校庭では部活動の賑やかな声が響いている。確か部活動はしていなかったはずだから、授業が終われば下校するはずだ。まあ帰宅部といえど真っ直ぐ帰るとは限らないから、相当待ち惚けを食らう可能性はあるのだが、他に良い方法も思いつかない。

幸い、待ち惚けは十分ぐらいで済んだ。目的の人物が友達らしき生徒数人と正門から出てきた。相手もこちらに気がついたのか、声を掛けるまでもなくこちらに近づいてくる。

「やあ、こんにちは」

「おや？ 眼鏡のお兄さん、こんなところでどうしたの？」

近づいてきたのは黒髪的女子生徒だった。人なつっこい感じは美希に似ている様でもあり、正反対の様でもある。美希の学校の友達であり、何度か面識がある。仕事で学校帰りの美希を直接ピックアップすることがあるからな。美希の交友関係は幅広いらしいが、この人物は常に見かけるので相当親しい間柄なのだろう。他にも女子生徒が数人付いてきているが面識は無い。

「えー、どうしたの？ この人知り合い？」

「うん、美希の彼氏」
ぶっ！

突然の紹介に吹き出す。ちょ、ま！ 違うぞ、冗談だと言っても誰も聞いてくれない。恋バナは女子の燃料とでも言わんばかりに、オレを置いてけぼりにきゃーきゃー眼鏡だよ眼鏡ーっと盛り上がり始める。

そしてその外側から、何やら不穏当な気配が増大するのを感じる。なぜか周囲の温度が数度下がった様な気がする。というか視線が痛い。姿形は見えないが、大体の想像はつく。たぶん男の視線だ。
「なにごくナチュラルに嘘言ってるんだ」

「嘘ってほどでも無いと思うけど。実際、美希のパパ除けば、今一番多くの時間を過ごしている男性だと思うし、一番親しい男性じゃないかな」

「……なぜそういう言い方をする？」

「まー未だに美希に言い寄る子多いからね。彼氏がいるとなったら、少しは連中も落ち着くでしょ」

「その分、オレは身の危険を感じるんだが」

ああああ、視線で人を殺せたらいいのに的な何かを感じる。夜道に気をつける所か、今身の危険を感じる。

「で、何か用？　ちなみに美希は先に帰ったよ」

黒髪の少女は先回りして告げる。まあこの場に美希が居ないことから大体察しはついていた。

「いや、まあそれはいいんだ。いや良くは無いけど、今はいいんだ」

「んー、プラス十点」

「？」

「美希と仲直りしたいーい、けど会ってくれない。じゃあ直接乗り込んじやえと思ったけど、家や学校で直接捕まえても多分ダメだと思った。違う？　なのでプラス十点」

「……ああ」

その通りだった。美希と会うのなら下校前から学校で待っていると、直接家庭訪問してしまった方が確実だ。でも、それは逆効果な気がした。こちらでミスをした挙げ句に、相手が逃げようのないところで捕まえるのは、たぶん何か違う。それは大人の卑怯な部分だと感じるんじゃないだろうか。

「でも、美希を捕まえようにもどこに行ったか皆目見当が付かない。なので私に聞きに来た。違う？」

「……おっしゃる通りで」

「マイナス五十点。」

「うぐっ」

冷徹な判定だった。いや全く反論の余地が無い。

「彼氏の癖に彼女の行き先が分からないなんて、ひどいよねー」

「い、いや彼氏では無いと……」

「だったら尚更じゃん。ねえ『プロデューサー』さん？」

「うぐぐっ」

フルボッコだった。ぐうの音も出ないとはこのことだな。周囲の女子生徒たちからはぶーぶー非難され、更にその外側の見えない方々からも射殺するような視線が突き刺さる。いやお前等、仲良くしても仲悪くしてもダメなのか、そうなのか。そろそろ本気で夜道に気をつけたくなってきた。

「美希って引き摺らない性格だから、結構今みたいな状態って珍しいんだよね」

今みたいな状態。それは多分、落ち込んでいるってことなのだろう。少なくとも傷ついていてるってことは確実なんだろうな。

「それって、つまりまだ脈はあるってことじゃないかな」

「……そうか」

それを聞いてほっとしている自分がいる。不謹慎な物言いだが、美希がまだ落ち込んでいるというのなら、アイドルに対して未練があるってことだ。全く無関心になってしまうのが一番恐れていた事態であり、それは今はまだ免れている様だった。

「何か美希から聞いてない？　というか、ホントに全く話も出来てないの？」

「それが、話が出来たのは一回きりなんだ。お魚屋さんに居るとかどうとかって言っていたけど」

「……プラス五点」

何か思い当たることがあるのか、黒髪の少女はにんまりと笑った。えっとそれは、お魚屋さんに何か心当たりがあるってことか。

「何か心当たり、あるのか？」

「うん。確かにお魚屋だわ、あれは」

くすくすと笑っている。一体何が可笑しいのだろう……まさか本当に築地にいるとか言うんじゃないだろうな。

「でもまあ、それは教えられないなあ。というか、こんなヒント出されて思いつかないんじゃないや更にマイナス五点って感じだよ、お兄さん」

「うっ、それはそうなんだが……っていうか、あれはヒントなのか？」

「うん、まあ本人意識してないかもだけど。追ってきても吝かでないという感じだと思うよ」

「そうなのか。丸つきりにされてないと思っていたんだが……年頃の女の子ってのは難しい。」

「美希に会えて、もし美希が本気でアイドル辞めたいって言ったら、お兄さん……どうする？」

不意に、黒髪の少女は真顔で問うた。人をからかうような無邪気な表情は掻き消えていて、その瞳はまっすぐにオレを見上げている。

「……それが美希の本気なら」

だからオレは真剣に答える。それは少し前の自分なら答えられなかった類の質問であり、そして今なら自信を持っていえる。

「オレはそれを応援する」

それを聞くと美希の友人はにっこりと微笑んで、両手の指をぱつと広げた。

「プラス十点。その答えに免じて、大サービスでヒント教えてあげるね」

「……いいのか？　なんかまだマイナス点数な感じだけど」

「そこは残り三十点、美希から貰えるように頑張ってね」

その残り三十点を獲得するべく、オレは今奔走しているという訳だ。お魚屋さん「アクアリウムショップ」というのは、気がついてみればなるほど美希らしい。ショップに美希はいなかったが、ここを起点に行動していると分かればぐっと捜しやすくなる。

……とはいうものの、実際に美希を見つけるのも、そして見つけた後も大変な苦勞をすることになるのだが。自業自得とはいえ、残り三十点は重かった。

ファーストライブまで、あと三日。

新曲のレッスンや美希の「家出」など様々なトラブルがあったものの、ついにライブまであと数日のところにまで漕ぎ着けた。準備はほぼ終わり、あとは開催を待つばかり。律子は仕事先からタクシーで帰社途中だった。夜も遅い。タクシーの車窓に目を向けると、丁度エキサイトホールの前を横切るところだった。設置された看板が見えた。冷静さを装っても、自然と興奮してくるのが押さえられない。手が震える。

ついにここまで来た。

長いようであつという間だった。本当にあの大会場でライブを開催するのか、夢なんじゃないのかと思う時もある。律子は高ぶる気持ちを抑えつつ、手元の資料に再度目を通した。

それは彼、プロデューサーが提出した企画書。全てはこの企画書から始まったことだった。小さな芸能事務所ではない765プロにとってはリスクの大きい賭け。彼の企画はつまり、765プロの所属アイドル全員を一気に売り出す計画のことだ。

彼は本気で、765プロのアイドル全員がトップアイドルになれると信じている。

そこが私、律子との違いだと思った。私ももちろん、彼女たちの素質は信じている。しかしアイドル業界は厳しい。才能があるからと

いつて必ず成功するとは限らないし、上には上がいるものだ。それは私が、元アイドルだからこそ痛烈に感じている事実である。それは私がプロデューサーをする上での強みであるのだが、同時に弱みでもあるのかなと思い始めている。

それは、私が竜宮小町をプロデュースしたことに端的に表れている。まずは三人を売り出す。それは現実的な手段であり、事実成功した。戦力は集中すべし。出来ることから確実に。その判断に間違いは無い。

彼は、765プロのアイドル全員を売り出すことしか考えていない。それが正しい選択だとか、早道だとか、そういうことはたぶん彼は考えていない。彼にとってはそれがごく当たり前過ぎる行動でしかなく、恐らく意識すらしていないのだろう。

まだ早計だと、そう言うのは容易い。

しかし躊躇う。リスクが大きい選択。しかしそれは、確かに私たちの『夢』の一つなのだ。だから、それがとても困難な道であっても「この道を行こう」と言われた時に「ノー」とは答えなくなかった。そうして今、夢の実現まであと一步のところに来ていて。

彼の計画は内容としては至極シンプルなものだ。奇をてらったことは何もしていない、と言っている。単純、王道。たぶんこの計画が成功した時、周囲の人間は成功に驚きはしてもその手法に驚きはしないだろう。

そう、この計画には功名心というものがない。「私がやりました、仕掛けました」という部分を感じられない。この計画が成功した時、人気は竜宮小町、パフォーマンスは765PRO ALL STARS、裏方はあの電話の主、その辺りが評価されるだろう。彼の名前はきつとどこにもないし、彼はそれでいいと思っている。

「ノー」と答えなくなかった律子の最後の一押しをしたのは、たぶんそんな彼の態度なんだと思った。

律子が戻る頃には、事務所はしんと静まりかえっていた。

レッスンや仕事帰りの春香たちで賑やかだった事務所も、彼女たちが帰ってしまうと途端に寂しくなる。今事務所に残っているのは高木社長と小鳥さん、そしてプロデューサーだけだった。社長は社長室で、小鳥さんは机で事務仕事をしている。

プロデューサーはというと、テレビとソファが設置されたりビンクの様な空間で、一人テレビを見ていた。正確にはテレビ番組では無く、DVDに録画したムービーを見ていた。画面の中では春香が転けたり、やよいが割烹着を着て掃除していたりする。プロデューサーが入社直前にカメラマンとして撮った、あのプロモーションビデオである。

「あら、懐かしいビデオですね」

外套を脱いでから律子はプロデューサーの反対側のソファに腰を下ろした。ライブの準備がほぼ終わった今、彼もまたちょっとだけ時間の隙間が出来たのだろう。しばし二人してビデオを眺める。

「みんな……いい顔してますね」

「そうですね」

プロデューサーが同意する。そしてまた沈黙。ゆつたりとビデオだけが流れていく。よく見てみると、彼は一通の手紙を手にしていた。白い封筒だから仕事の手紙ではなさそうだった。宛名は……ここからはさすがに見えないし、覗き見るのも失礼に思えたので止めた。

ただ「宛先不明」の消印だけは見えた。

「そういえばプロデューサーって、どこで社長にスカウトされたんですか？」

ふと律子は思いついて質問してみる。そういえば彼がどういう経緯で765プロに入社したかは聞いたことがなかった。社長がスカウトしたとは聞いているが、新人プロデューサーならどういう切っ掛けで見いだされたかには興味があった。

「いや、あまり大した話はないですよ。大学に通っている頃にアル

バイトしていて、それがたまたまテレビ局の大道具の手伝いとか、そういうものだったんですよ」

苦笑しながら彼が答える。なるほど、だから新人にしては妙に業界に詳しい部分があったのはそのせいだったのね。スカウトされた理由については……まあ本人も分からないんでしょう。社長がまた例の「ピンと来た」とかで引つ張ってきたんでしょうから。

「正直、芸能界とかアイドルとか、そういうのにはまあ人並み程度の興味しかなかったし、高木社長から765プロに誘われた時も、正直乗り気じゃなかった。というか、なんでこの人はオレに声をかけてきたんだらうって驚きの方がね。確かに就活はしてたけど、初対面だったし」

「やっぱり、社長だったらどこでも相変わらずなんですネ」想像通り過ぎて律子は呆れるのを通り越して笑ってしまった。

「『とりあえず、アルバイトだと思って一度来てみないか』と言われたのが、あのカメラマンの仕事だった。まあアルバイトの続きだと思えばいいかーと思ってね。正直、ここに来るつもりは無かった。就職の話は断ろうと思ってカメラ回してた」

断ろう。その台詞に律子はちよつと驚いて目を丸くした。なんというか、今までの彼の態度とはイメージが違う感じがした。こうもつと、全肯定的なイメージを感じていただけに、不意打ちを食らった気分だった。

しかし。

そう言っつてビデオを見つめている彼の表情は、とても穏やかだった。

それで。カメラのレンズを通して彼女たちを見て、思ってしまった。ああ、なるほど。高木社長が親バカみたいに自慢する気持ちが分かる。みんないい子たちだ、ってね。そして魅力的でもあった。まああまり流行風ではないのかも知れないけれど、みんなアイドルとして成功できる。そう感じたんだ。

だから、逆にこう思った。

彼女たちはいずれ近い将来、アイドルとして大成する。それだけのポテンシャルがある。だからオレは思った。

『じゃあオレは別に、いらないんじゃないか』

プロデューサーとして彼女たちをプロデュースする必要性を、全く感じなかったんだ。そもそもオレはプロデュースの経験も実績も無い。そんなオレにやれることがあるのか、とね。

だからオレは、高木社長の誘いは断ろうと思った。

そう思い、カメラを置いて背を向け、ふと振り返って思った。

彼女たちはいずれ大成する。それだけのポテンシャルを持っている。だから大丈夫。

- - - - - 本当にそうなのか？

アイドルとしての資質を持つだけ成功するのだろうか。ならどうして、今、765プロのアイドルたちは足踏みをしているのだろうか。アイドルとしての資質があっても、成功するとは限らないんじゃないのか。

あの子の様に。

まだ大学生の頃。テレビ局でアルバイトをしている時、一人の女性と出会った。彼女はアイドル志望で、まだ有名ではなくって、エキストラとかコンパニオンガールとか、そういう仕事をしていた。彼女は、アイドルとして魅力的だったと思う。少なくともオレはひたむきにアイドルを目指す彼女に、そう感じていた。

でも彼女は、アイドルにはならなかった。

なれなかったのか、それともならなかったのか。それは分からない。別に親しかったわけじゃないし、話したことも数回あるかどうか。偶然同じ大学だったから、赤の他人よりはマシだったのかな。だから本当の事情は分からない。

事実なのは、彼女がアイドルを目指すのをやめて、大学卒業と同時に地元に戻ったことだけ。

オレは一通の手紙を書いた。住所だけは分かったからね。「もうアイドルは目指さないのですか」とだけ書いた。まあ届かなかったけど。

なんでそんな手紙を書いたのか。よく分からない。なんか今思い返すと、すごく恥ずかしい感じがする。ただ、やっぱり彼女がアイドルになる姿が見たかったんだと思う。彼女にとってアイドルになることが本当の夢だったのか、それは分からない。でもオレにはそう見えたし、そうなることを願っていたんだね、多分。

まあ新人のオレが頑張ったところで、彼女たちが成功するだなんて思っていない。逆に足を引っ張るかも知れない。それでもやろうと思ったのは、彼女たちがトップアイドルになる、それを見届けるというのがオレの願いだと気づいたからだ。

自分の夢を叶えるのを、だれか他人に任せるなんてそれは夢じゃない。だから、やろうと思った。

今でも、もつと腕のいいプロデューサーを見つけてきた方が彼女たちのタメになると思うこともある。でも、オレは彼女たちがトップアイドルになるところを一番近い場所で見たい。だから、彼女たちから必要ないと言われるまでは続けようと思う。まあこれはオレのワガママだな。

だからオレにとって功名心があるとすれば、彼女たちから必要だと思われること。たぶんそれだけなんだと思う。

アイドルってなんだろう……と思っていた。

彼女たちをアイドルとして成功させたい。そう思っていた。だからアイドルってなんだろうと、ずっと考えていた。彼女たちを「アイドル」にするのに、「アイドル」が何なのか分からないのではどうしようもない、と思っていた。

でも、違ったんだ。

もちろん「アイドル」という方向からのアプローチもあるだろうし、それが正道だろう。でも、オレがやりたいのは、違う。違ったんだ。765プロに入る前。まあ正確にはあの時点で入社していた訳だが。カメラマンとして、彼女たちの密着取材をした時、もう結論は出ていたんだ。

カメラのファインダー越しに彼女たちを観て、そして思った。ああ、彼女たちはそのままできつとアイドルとして魅力的だと。何かきっかけさえあれば、大成すると。それだけ彼女たちは魅力的だった。

……いや、それも少し違う。

ほかの人間が彼女たちをどう観ているかなんて知ったことか。彼女

たちにどういう夢を被せているかなんてのはどうでもいい。アイドルが何なのか、知ったことか。オレはただ、オレは……理屈も理論もまるで存在しない、ただアイドルになりたいという彼女たちの夢、それを、その行く先を観たかった。

何かによって歪められたモノではなく、ただ彼女たちが彼女たちのままで、アイドルとして活躍する姿を観たかった。ウケとか利益とか流行とか、そんなものなんか知ることもない、ただ夢だけを追い続けた存在が喝采を受ける姿が、観たかった。

彼女たちがアイドルになりたいという夢を、オレも観てみたい。それが俺の夢でもあるのだと、そう思ってしまうほどに、オレは、魅了されていたのだ。

？ 質問です。？

？ 貴方にとって『アイドル』ってなんですか？ ？

オレにとっての『アイドル』とは……
夢はみんなまとめてトップアイドル。

765PRO ALL STARS。
そのファーストライブの幕が上がる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5331y/>

やがて花咲く彼女たちへ

2012年1月13日22時56分発行